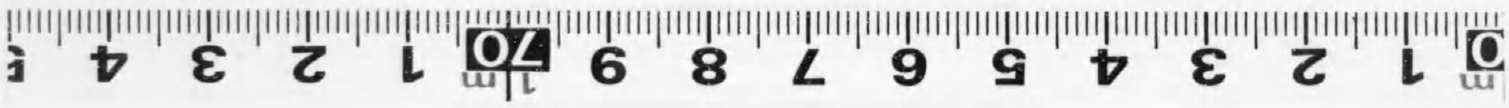
522
13
176



courtesy of Miss Jessie Weaver

EDMUND KEAN AS *KING RICHARD THE THIRD*

FROM A MEZZOTINT

莊子三世

坪内逍遥

大譯
13. 3.29
購求

緒言

此作には、予が既に譯出せる諸作中に無き特質二三あり。所謂「編年史劇(クロニクル・プレー)」系に属する作たることは其一なり。先進作家の作風を模倣したる跡の歴然たるは其二なり。詞句の上に奇巧を弄することを主としたるは其三なり。

沙翁學者の輿論は、此作の書きおろされし年を一五九三年か四年なるべしと假定せり。作者が二十九歳か三十歳の年に相當す。すなはち其未だマーロー、キッド、リ、ーらの

影響を蟬脱する能はざりし頃の作なり。主人公の性格を誇大的に描寫することに全力を傾注するの結果、其他の人物をして殆ど其傀儡たるに過ぎざるものとならしめたる、若しくは其白（せりふ）の或部分の、明かに雄辯（オレーション）式にして、寧ろ耳に訴ふるに適したる、及び同句法を重疊したる愁歎の語の抒情詩式なるなどは、其師マーローが作風及び其周圍の感化なり。次に、頻りに兩義語、緣語、對句、反語等を疊用して、專ら詞句の上に奇巧を弄したるは、所謂衒耀體（ユーヒユーイズム）なるものにして、ジョン・リ、ーの創始に係り、其頃最も喜ばれたる美文の形式なり。之を警句問答（パーチー）式ともいへり。詞は

過巧を厭はず、比喩は牽强を避けず、當意卽妙に、我所謂鵬鷃返し式に、敵手の用ひたる語を翻用して、應對するの法なり。「ハムレット」又は「ロミオとジュリエット」などにも多少は此句法の名殘を留めたれど、此作に於けるが如くには甚しからず。これらはリ、ーの作風に負ふ所多きものと評すべく、是れ將た目に訴ふるよりも耳に訴ふるを主とせり。次に、舞臺上の諸種の敏活なる言動、就中、むごき殺戮、寫實的の短き問答、怨靈の出沒等は、主として實際的劇作者としては當時第一人の稱ありしトマス・キッドの作風に倣ふ所多かりし爲なりと想像せらる。

要するに、此作は沙翁が習作期の一代表作なり。

正史に依據するを本領とせし史劇なる故に、此作の筋は、大抵史實のまゝなれども、只三時間以内に演了せらるべき脚本としての必要上、少くとも十四年間に亙るべき事蹟を、一二ヶ月以内の事件らしく壓搾し、實際は時をも處をも異にせる事を同時に同處に起らしめたる、及び舞臺的效果の爲に、二三の事態もしくは際會を假作したる——例へば故王の葬儀の途上にて故太子の妃アンを說く條、又は外國に在るべき筈の故王の妃をして英王宮内に出

沒せしむる條——などを除けば、他は其頃正史と見做されをりしホール及びホリンシェッドの編に係る「英國編年史」の直寫なりと言はんも不可なし。今日の進みたる史眼にて見るも、(實はさまでの惡漢にても、不具者にてもあらざりし主人公を醜怪なる惡魔其者の如くに寫せる點と總體に事件、人物を、メロドラマ風に、粗大に誇張的に描きたる點とだけを差引けば)、ほゞ史實を傳へ得たるものと評すべし。力めて正史に憑據せるの例は、此作者の後の羅馬史劇にも見る所なれども、それらは風俗を寫す點に於て、尙流石に非史實的の點多く、古羅馬のそれを英國のそれに

て間に合せたるが如き氣味あり。然るに此作に寫されたる英國は、作者自身の時代に先だつこと、僅々八九十年前のそれなれば、其風俗の描寫も自然にして實に近く、隨つて我活歴劇に似たる所に此作の特色ありとすべし。

沙翁の英國史劇は、前後七種あれども、此作は「ヘンリー六世」(上中下三部)のすぐ次に書かれたるものらしく、後の一層圓熟したる筆に成れる「ジョン王」、「リチャード二世」、「ヘンリー四世」(上下二部)、「ヘンリー五世」、「ヘンリー八世」などゝは、其撰を異にせり。

「リチャード三世」の出版は、一五九七年の四折本(クオート)を最先のものとなす。其後、作者の存生中に、同じく四折本にて、更に五種、其死後に更に二種、都合八種の異本あり。いづれも、例の一六二三年の全集二折本(フオリオ)發兌以前の刊行たり。第一の四折本は、表題を「リチャード三世の悲劇、云々」と長々しく物したるのみにて、其作者の誰たるかを記さず。沙翁作と明記したるは、第二の四折本を始めとす。各種大概其發行者を異にし、本文にも、時に甚しき異同あり。されど其底本の、毎に第一、即ち最先の、四折本たることは明かなり。隨つて、第一の四折本の本文と此等諸種の四折本のとを

參酌し其紕繆を訂正して成れりと稱する第一二折本のそれとの勝劣に關しては、學者間に多少の異論なきにあらざれども、予は敢て其孰れをも偏重することをなさず、例のファーネスの備さに各種間の異同を擧げたる集注本を參照として、隨時に判斷を下し、自ら信ずる所によりて本文を取捨し、例の如くやゝ詳しきトガキを插加しおきぬ。　嚴格なる沙翁學者らは、或は、予のトガキを專斷に過ぎたりとも難ずるならんが、予は、經驗上、特に邦人の爲には、かゝる用意の止みがたきを確信す。　すなはち、或は、アーギング、ブースの舞臺用脚本により、或は英米劇場の傳說に

より、或は名優の逸話により、或は當該の作に關する諸名家の批評又は繪畫により、或は各種本に異同を生ずるに至りたる所以等を推測することによりて、此場は云々ならざるべからずと判斷し、其箇所相當のトガキを挿入せり。安りに書き加へたるにはあらず。　現に行はるゝ諸種の沙翁集のトガキとても、其大部分は後人の附記に係るものたるを思はん人は、必しも予が此擧を咎めざるべし。

前陳せる如く、此作は、作者が年壯氣鋭なるに任せて、縱橫に揮灑したる朗讀式の劇なるゆゑに、夙に八版を重ねし

程、其書きおろしの當時に、人氣ありし作なれども、演劇の性質の著しく變易せし次々の代の劇場用としては、到底不向きたるを免れざりき。　されば、今も尙屢〻上場せらるゝ沙翁の名作中の一たるにも拘らず、之を悉く原作通りに演ぜし者は、其創作當時の名優リチャード・バーベージありしのみ。　彼れの次に(一六七七年)リチャード三世の役を演ぜしベッタートンの臺帳も、一七〇〇年に上演せられたる同表題の作も、沙翁のにはあらず。　前者は全く別種の作にして、後者は俳優兼作者たりしコリー・シッバーの縱まなる改作に係るものなり。　而も此劣等なる改作は頗る俗尙に適

ひたるらしく、十九世紀も其中葉近くまでは、これのみが實演用としては採用せられ、名優ガーリックも、ヘンダースンも、エドマンド・キーンも、チャールス・キーンも、クックも、マクリディーも、專ら之によつてリチャードの役を勤めき。　十九世紀に入りて後、最先に原作通りを演ぜんと企てしはマクリディーなれども、實際シッバーのを排斥し得て、沙翁のを演ぜしはホエルプスなりき。次に、原作への復歸に努力せしは米のエドギン・ブースにして、其次は英のアーギングなり。　然れども、ブースのそれとても、其實演に供せし臺帳を閲すれば、殆ど改作と評しても可なる程に、自由に切縮め、場面を前後にし、筋にも白にも種々

の改修を施したり。アーギングに至りては、只多く切縮めたるのみにて、實演用に供したりしが如し。

これらの事實によりても、此作の作意及び樣式の頗る古風なるを察知すべし。

「リチャード三世」と題したる劇は、沙翁のが世に出でし前に二種ありき。其一は拉典文にて書かれたる "*Richardus Tertius*" なり。こは博士トマス・レッグといふ者の作にして、一五七七年頃カムブリッヂのセント・ジョン大學にて實演せられきと傳ふ。其二は "*The True Tragedy of Richard the Third*" (リチャード三世の實傳悲劇)にして、一五九四年頃女王附の俳優ら之を演じきと傳ふるものなるが、こは按ふに、沙翁の作の好評高きに促されて、誘ひ出されし庸劣の作らしく、沙翁は此等の作には何等の負ふ所もなかりし如し。偶〻其事件や人名の符合することあるは、其材源が、共にホール、ホリンシェッドに出でたるに因るなるべし。

此作の背景となれる史蹟は、沙翁の前作「ヘンリー六世」(上中下三部)と此作とに連亙して始終すると、恰も源平の爭鬪の「源平盛衰記」に於けるが如く、又、我南北朝の戰亂の「太平

記」に於けるが如し。即ち英國王ヘンリー二世に創まれる帯木王朝(プランタジエネト)の末裔たるランカスター系とヨオク系との王位爭奪の顚末にして、其間實に三十年(一四五五年より一四八五年に至る)侯伯の同黨伐異して、此亂に族滅せらるゝ者夥しく、英國の封建制度は、爲に其衰亡を早めたりとさへ評せらるゝ程の慘禍を逞うせる内訌なりき。今讀者の便を計りて、左に其史實の大要を掲ぐ。

そも〳〵帯木姓(プランタジエネト)王統内に、ランカスター系とヨオク系との相竝立するに至りし濫觴は、彼の所謂「百年戰爭」に於て、大いに佛國に打勝ち、彼の國の王ジョンをさへも捕虜としてロンドンに拘致せし英雄王エドワード三世の朝に

在り。此王に五子ありて、長子は有名なる黑太子(ブラックプリンス)エドワードにして、次はクラレンス公ライオネル、第三はランカスター公ガントのジョン、第四はヨオク公エドマンド、第五はグロースター公トマスなりしが、此第三子ランカスター公の嫡子ヘンリー英俊にして、三世王の後を享けし庸主リチャード二世(黑太子の子)の國政を誤るや、代りて王位に即き、鋭意不逞を掃蕩して、王冠を其子ヘンリー五世に讓れり。ヘンリー五世は、其材幹武略遙かに父に越え、新たに佛國と戰端を發き、屢〻戰つて屢〻勝ち、遂にロアール河以北の佛國内地を悉く英國の有となしゝ程の英主なりき。然るに、五世王の殂するや、佛に女傑ジャン・ダークの奇蹟的出現ありて、機運漸く英國の爲に非なりしに、英の新王ヘンリー六世柔弱多病にして、かゝる内外多端の難局に君たるに適せざりしかば、内訌の禍因日(ひび)に長じ、外患將た倍〻加はれり。是(こゝ)に於て一四四四年、遂に佛國と和し、該國の名門アンジュー公の女マーガレットを容れてヘンリー王の妃とせり。(本劇中に現はるゝ老妃マーガレットは是れなり)。マーガレットは其頃齡尙丁年未滿なりしが、才色共に秀でたる女丈夫なりしか

ば、忽ち柔弱なる六世王を御し得て、政柄を左右し、爲に英國の宮廷を黨
爭の渦中に陷らしめぬ。ヨオク公リチャードの佛國都督たることを罷めら
れて、該國より召還せられしなども、此黨爭の結果なりき。
ヨオク公リチャードは、其母系に於てエドワード三世の第二子ライオネルの裔に當
れり。故に、同王の第三子ランカスター公ジョンの裔たるヘンリー六世よりは
其家格は優りたり。是れ後に系統爭ひの起りし所以なり。
ヨオク公は、王妃黨の跋扈を憤りて、窃かに風雲の機を窺ひなりしが、遂に
君側の姦を除くを名として兵を起せり。是れ實にヨオク黨とランカスター
黨とが、互に干戈を執つて相見るに至りし始めなり。これより、ヨオク公
の長子エドワードが一四六一年に、エドワード四世と稱して王位に卽き、ヨオ
ク王統の祖となりしまでに、大小の戰爭幾回となく續きて、全國鼎沸の
如く、一勝又一敗、双方共に恰も走馬燈の如き浮沈盛衰を經驗せり。ヘ
ンリー王のヨオク黨の爲に虜となりしと前後二回、王妃マーガレッドの身を以
てまぬかれしとも前後二回なり。ヨオク公は、此亂の初めに於ては頗る

好運なりしが、一四六〇年十二月のウエークフィールドの一戰にて再擧せる
王妃の爲に敗られて、長子エドマンドを殺されしのみならず、其身も虜と
なりて斬られたり。而して其首は、紙の王冠を戴かしめられて、市門に
曝されぬ。然れども王妃將た、當時第一の權家ウォーリック伯の敵黨に加
擔するに及びて、大いに敗績し、王及び王子と共に再び蘇國に奔りたり。
ウォーリック伯は、其一去就によりて、自在に王統を變易せしゆゑ、時人綽號
して「國王製造者」といへり。されば、後に伯の更にマーガレットに黨するや、
ヨオク黨は又忽ち大敗し、王エドワード四世は佛國に奔り、ヘンリー六世は再
び王としてロンドンに迎へられぬ。
ウォーリック伯の變心は、エドワード四世が、其卽位後間もなく、ランカスター黨の
一貴族士爵ジョン・グレーの寡婦を容れて妃となしゝに原因す。寡婦はエ
リザベス・ウッドヴィルを呼び、夫の戰死後其財產を沒收せられて、遺族の窮乏の
甚しきを悲み、或時エドワード王に謁し、幼兒らの爲に亡夫の財產を給與
せられんことを哀願せり。王之を憫むと同時に、深くエリザベスの美貌

に眷戀し、敵黨の貴族たるの故に、種々の異議あるをも敢て顧るに遑あらずして、遂に之を容れて妃となし、剩へ其子弟らをも次第に登用して貴族に列しぬ。これより妃エリザベスの一黨漸く宮廷内に威を振ひ、自然にウォーリック黨と反目せり。ウォーリックは初め其女の一人を王妃たらしめんの底意なりしに、此心算齟齬せしのみか、王妃黨の跋扈の爲に、不快を覺ゆること次第に重なりしかば、遂に王弟クラレンス公ジョールジと結托して、更に又王位の交迭を計らんと欲し、すなはち先づクラレンス公に其一女を嫁し、又他の一女を前王妃マーガレットの子エドワードに嫁して、ランカスター王家の殘黨を身方となし(一四七〇年)忽ち エドワード四世を逐ひて、三たびヘンリー六世を位に復し、政權は之を自ら握りぬ。

然るに、翌年の初め、エドワード四世、佛國の一名族ブルゴーニュ公の援を借りて英國に進軍し、バーネットの地にてウォーリックと戰つて、大いに勝ち、伯を殺し、次いでチュークスベリーの決戰によつて、妃マーガレット及び太子エドワードを生檎し、太子を殺し、妃を獄に下しぬ。之より少しく先き、ヘンリー六世は

三たび其位を奪はれて捕虜となり、同じくロンドン城内の獄に入れられしが、バーネットの戰後、獄内にて暗殺せられぬ。エドワード四世及び其弟グロースター公リチャードの手に羅りしなりと傳ふ。マーガレットは、五年の幽囚の後、佛王の爲に贖はれて故國に歸り、餘生を憂愁の中に送れり。

かくしてランカスター王家は殆ど滅亡し、ヨオク全盛の世となりぬ。さて、近時の戰役に於て功勳最も著しかりしは王の第二弟グロースター公リチャードなりしかば、王をはじめ、廷臣多くリチャードには信頼せしが、王の第一弟クラレンス公ジョールジは稍疎外せらるゝ趣ありき。然るは、公は故ウォーリック伯の長女イサベラを妻として、一時は彼の伯の肱股たりしゆゑなり。

伯の次女アンは嘗てヘンリー六世の太子エドワードに嫁したりしが、夫がチュークスベリーにて戰死せし後は、父伯の莫大なる遺産は悉く姉婿クラレンスに管理せられて、其の心のまゝならぬを唧ちをれり。グロースター公リチャードはアンの財産を得て、いよ〳〵兄クラレンスを凌がんの意あり、すなはち強ひてアンに迫りて、遂に之と婚したりしが、これより財産分配の

事に關して、クラレンスと紛議を生じ、あはや内亂をも釀さんとせしが、王エドワードの調停によりて事なきを得たり。然れども、その以後も、とかくクラレンスと王、王妃黨及び其他との折合は圓滿ならず、其間に種々の誤解讒誣行はれ、遂にクラレンスは、寃罪の爲に、ロンドン城内の獄に下り、幾ばくもなくして獄中に死せり。王の内命によりて、リチャードの手により、暗殺せられしなりと傳ふ。

既にして王はおのれの殘忍を悔ゆるの念切なり。夜間だに安眠する能はざる煩悶の苦を慰せんとして、專ら女色に耽けり、遊宴を事とせり。此際最も寵を受けしはジェーン・ショーアといふロンドンの一富商の妻なりさ。王は此の放蕩生活を續くること二年に及びしかば、健康次第に衰へて、病床の人なり、限りなき悔恨の苦惱の間に命を終りぬ。

王の殂するや、太子エドワードは纔かに十三歳、次子リチャードは十一歳なりしかば、妃エリザベスは深く前途を憂慮し、急ぎ廷臣と會して、太子を新王と宣し、同時にラドロー城なる實弟リヴース伯の許に使を送りて、同處に在

る太子を奉じて、速かにロンドンへ歸り來れと命じぬ。然るは、此際大軍の將となりて北方の鎭撫に從へりしグロースター公の進退を懸念せしが爲なり。公の大軍をひきぬて急に北方より歸るや、恰もロンドンに赴かんとする途上にて新王及びリヴースらと會し、初めは飽迄も異心なげにもてなして油斷せしめ、急に起つて新王及びリヴースらを捕へ、直ちにロンドンに入り、リヴース其他王妃の黨與を悉く免黜し、新王にはエドワード五世の名稱を與へて、己れは、自ら薦めて、攝政の任に當れり。此際、妃エリザベスは、其次王子、王女らと共に、ウエストミンスターの聖殿内に潛みて、一歩も外に出でざりき。

さるほどに、リチャードは、徐ろに種々の策を講じ、先づ前王エドワード四世が其妃エリザベスを迎へし前に、他の婦人と密婚せし事あるを口實に、エリザベスとの婚を(二重結婚なる故に)不正當なりと言ひ做し、其腹に生れし王子らを庶子視せんとせり。次に、クラレンスの子女らの王族たる權利をも剝奪し、尙王妃黨の嫌ひある者を悉く一掃し去らんと圖りぬ。此際

其犧牲となれる寃死者の首魁は卿ヘスチングスにして、リヴース伯ら亦た同時に其命を失へり。（ヘスチングスを議場にて捕縛する前後の事情は、殆ど事實のまゝ本劇中に寫し出されたり）。次いでリチャードは幼王と其弟王子とをロンドン城内に幽し、其腹心たるバッキンガム公を自己の傀儡同樣に活動させて、或は市民に勸告せしめ、或は巧みに臨時の廷臣會議を操縱せしめて、朝野の擧つて自己を王位に推薦するに至らんやうに仕向けたり。（此間の消息もほゞ事實のまゝ本劇中に縮寫せられたり、僞賢人を裝ひて推薦を辭退せしなども史實通りなり）。

リチャードの戴冠後間もなく、王妃の黨人ら王妃及び王子らの爲に叛旗を翻せり。之より先き、リチャードは窃かに二、三の無賴漢に命じて、幽閉中の二王子を殺害せしめしと、此時に至りて明かとなりしかば、王妃黨は憤ること更に甚しく、ます〳〵復讐の軍議を凝らせり。王リチャードが腹心たりしバッキンガム公さへ王の不信薄恩を怨む故ありて、背叛し、王妃黨に身方して、兵を起せり。此際叛軍に王位繼承の候補者として囑目せら

れしは、當時佛國に在りしリッチモンド伯ヘンリー・チュードアなりき。伯はランカスター家の廻緣者なりしかば、之に妃エリザベスの王女を配して、ヨォク・ランカスター兩系を結合し、以てリチャードに對抗せしめんと計りしなり。既にしてリッチモンド伯は、兵を率ゐて海を渡り、英國に上陸せしが、內應の約ありしバッキンガムが不意の洪水の爲に、其兵を潰えしめたる上に、已れ將た敵に捕へられて斬に處せられしかば、餘儀なく兵を引上げ去りぬ。

リチャードすなはち聖殿に潛める妃エリザベスに迫りて、其王女エリザベスとリッチモンドとの婚約を取消さしめ、王女を、最初は已れの王子エドワードの妃たらしめよと强要し、該王子の頓死し、續いて妃アン（ウォーリックの女）の暴逝するに及びては、之を已れの妃たらしめよと强要せり。然れども、廷臣らが、叔姪の結婚は法律違犯なり、とて諫爭せしかば、其事は遂に實行せざりき。

一四八五年八月、リッチモンド伯再び三千の兵を以て英國の西南岸に上陸せり。こゝに於て、王リチャードは直ちに優勢の軍を率ゐて、出陣し、ボスチオ

スの野に於てリッチモンドの軍と對峙せり。時に、英國上下の民心は大概王に離畔し、軍に從へる者と雖も、いつ敵陣に投降せんかも圖りがたかりければ、王は憂慮措かず、加ふるに積年の殘暴を回想して、良心の苛責に苦しみ、夜も安らかには眠り得ざりき。いよ〳〵開戰となるや、果して離反して敵軍に投ずるもの陸續相次げり。王狂憤して親ら陣頭に馬を進め、是非ともリッチモンドを討取らんと欲して、縱横に奮鬪し、手づから敵騎を斃すも數多に及びしが、遂に力盡きて戰歿せり。王は其最期までも王冠を戴きをりしが、敵に降りし一將スタンリーは其地に落ちたりしを拾ひ取りてリッチモンドに獻ぜしかば、全軍凱歌と共に新王の萬歳を呼びぬ。

リッチモンド位に卽きてヘンリー七世と稱せり。之をチューダア王朝の祖となす。此七世の嗣はヘンリー八世にして、其女のエリザベスは沙翁時代に名聲嚇嚇たりし英國王なりき。

以上の略史實は、今日普通に行はるゝ所の英國史によりて叙述せるものなれば、沙翁の此作意とはやゝ逕庭せる所多けれども、ホール、ホリンシェッドの「編年史」の事蹟は更に幾段か本劇のそれに近きものと知るべし。

大正七年十一月中旬

譯者識

本文中に「猪」といふ語をグロースターの代名詞として屢〻用ひたるは、「白き牡猪」が彼れの紋章たりしが爲なり。英國も、封建時代には、全く我國と同樣に種々の紋章を用ひたりしなり。グロースターは、パッキンガムを策士として利用すると同時にケーツビー(*Catesby*)ラトクリッフ(*Ratcliffe*)ロヴル(*Lovel*)の三人を其殘虐を行ふための前鬼後鬼の如くに働かせたりしかば、當時左の如き落首を作りて流布せしめし者ありき。*hog* とあるは、紋章に因みたるにて、いふまでもなくグロースターを指せるなり。

"The Cat, the Rat, and Lovel the dog,
Rule a'l England uwler the Hog."

登場人名

王エドワード四世、ヨオク系。

エドワード、四世王の太子、後に幼王エドワード五世。

リチャード、四世王の次子、ヨオクの幼公爵。

ジョールジ、四世王の弟。クラレンスの公爵。

リチャード、四世王の末弟、グロースターの公爵、後に王リチャード三世。

クラレンスの幼き嫡子。

ヘンリー、リッチモンドの伯爵、後に王ヘンリー七世。

大僧正(カーディナル)**ブールチヤー**、カンタベリーの監督長(アーチビショップ)。

トマス・ローザーハム、ヨオクの監督長(アーチビショップ)。

ジョン・モオトン、イリーの監督(ビショップ)。

バッキンガムの公爵。

ノオフォルクの公爵。　其子、**サリーの伯爵**。

伯爵リヴース、妃エリザベスの同胞。

ドオセットの侯爵及び卿**グレー**、共に妃エリザベスの子。

オックスフォードの伯爵。　卿**ヘスチングス**。

卿**スタンリー**、ダービーの伯爵とも呼ばる。

卿**ロヱル**。　士爵(サー)トマス・**ヂーガン**。　士爵(サー)リチャード・**ラトクリッフ**

士爵ウィリヤム・**ケーツビー**。　士爵ジェームス・**チレル**。

士爵ロバート・**ブラッケンベリー**、ロンドン城の監督官。

クリストファー・アース井ック、僧官。

トレッセル並びに**バークリー**、アン姫の侍士。

ロンドン市長。　ウィルトシャーの**刑執行官**。

牢守。

エリザベス、王エドワード四世の妃。

マーガレット、故王ヘンリー六世(ランカスター系)の妃。

ヨオクの**公爵老夫人**、王エドワード四世の實母。

登場人名

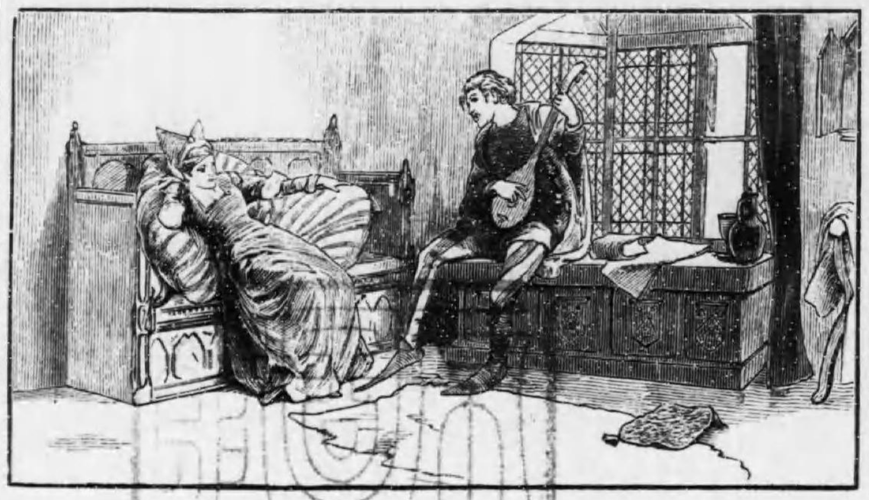
アン姫、故ヘンリー六世の太子エドワードの未亡人、後にグロースター公爵リチャードに再嫁す。

クラレンスの幼き女兒、マーガレット・プランタジェネットと稱す。

其他、グロースター公爵に殺害せられたる者共の亡靈、貴族ら、侍者ら、使ひ番、書記役、市民ら、刺客ら、使者役、兵卒等。

場所　英國。

RICHARD THE THIRD, KING OF ENGLAND



リチャード三世

第一幕

第一場　ロンドン街上

英國中世の「薔薇亂」といつた名高い内亂は、王室の系統爭ひの戰であつた。一方はプランタジェネット姓のヨオク公爵家を正系と立て、他方はプランカスター家のヘンリー王を正統と奉じ、長い間互ひに勝つたり負けたりしてゐたが、一千四百七十一年

の五月チュークスベリーの戰爭が其最後の決戰で、ランカスター方がとうゞ〳〵全敗し、ヘンリー六世王の太子エドワードは戰場で命を落し、女丈夫といはれてゐた妃マーガレットも捕虜となつたが、やがて國外に追放され、其後は行方知れずになり、ヨオク方は、元のヨオク公エドワード五世王の萬歳を呼んでロンドンへ凱旋した。これより先ランカスター家のヘンリー六世王はヨオク方へ捕虜となり、ロンドン城内に幽閉されてゐたが、チュークスベリーの戰爭後、一夜グロースター公爵リチャードの手にかゝつて非業の死を遂げた。　以上は此劇の開幕前の歴史的背景の概略である。

グロースター公爵リチャード出る。　偃僂で、跛で、容貌も醜悪である。

グロー　やつとヨオクの朝彦の天下となつたので、我黨の陰鬱な冬が去り、陽氣な、

快活な夏が來た。　我家におッかぶさつてゐた黑い雲も、先づ悉く海の底へ葬られてしまつた。　一同揃つて、額には勝利の章の月桂冠を戴く、刀痕だらけの甲冑は、只掛け並べて記念品扱ひにする、殺伐な喇叭や、太鼓や、物すごい進軍樂は宴會や舞踏會の愉快な音樂と變つてしまふ。　怖い顏色の軍人共も、例なら武裝した軍馬に跨つて、敵中へ躍り入つて、弱蟲めらを脅すといふところを、今は其しかみッ面を平滑させて、淫靡な琵琶の音色につれて、美人連の舞踏のお相手を勤めて、跳廻つてゐる。　ところが、予は、さういふ遊戯に携はるのに適しても居なけりや、又、自惚鏡の御愛顧を得るやうにも出來てゐない。　予は粗造貨幣だ。　びろつく淫蕩女神の鼻の先へ、物體ぶつて出て行くだけの身の尊嚴がない。　予はさういふ五體の美しい釣合を、あの虚僞の造化めに欺されて、變な風に切縮められて、不具のまゝ、半出來のまゝで、まだ出べきでない時に此世へ出て、產聲

を揚げさせられたんだ。だから格好が不様を極めてゐる。予が跛をひいて通ると、犬が見て吠える。如是な柔弱な、笛や鼓の太平時代となッちまッちやア、予の樂みは、日向へ出て、自分の影を見て、うぬが姿の不様なのを鼻歌に唄ふより外にア仕事はない。到底かういふ巧言令色時代に優待される好男子にアなられさうにない。だから、いつそのこと敵役になつて、あゝいふ馬鹿々々しい快樂を呪つてくれようといふのだ。もう脚色は出來てゐる。醉漢の譫語のやうな豫言や落首や夢兆なんぞで以て、大分危險な序開きをしておいた、兄王のエドワードと次の兄のクラレンスとを不倶戴天の敵同士にするやうに。幸ひに、予が機敏くて不信であるやうに、王がお心よしで眞正直でありや、次の兄アけふ必然獄へ下されるに相違ない、Gを頭字にしてゐる者が王の嗣子を殺して竟に王位を簒ふといふあの豫言の一件で。……おッと、さういふ陰謀は靈魂の深底へ引込んでろ、あ

そこへクラレンスが來たから。……

グロースターの兄、クラレンス公爵ジョールジ、警護されて出る。ロンドン城（監獄兼用）の監督官ブラケンベリー附いて出る。

や、兄さん、今日は。どうしたのです、武裝をした護衛がお伴をしてゐるのは？

クラレ　（皮肉に）陛下がわたしの身を案じて、かういふ護衛を附けて下すつたんだ、監獄へ往くまで。

グロー　（わざと愕いて）何の咎で？

クラレ　わたしの名がジョールジだといふので。

グロー　え、何ですと？　それならば、決して貴下の罪ぢやアない。貴下の名附親をこそ罪科に處せらるべきです。陛下は多分獄中で改名をお命じにならうとでもいふのでせう。しかし、一體、どういふ理由ですッ？　承はれませ

うか？

クラレ　さア、知つてさへゐれア。と言ふのは、わたしもまだ知らない。けれども、噂によれば、王は豫言や夢なぞを信じなすつて、或魔法師が三十六文字中のGの字は陛下の血統を絶やす者だといつたとかで、わたしの名が其Gを頭字にしてるといふところから、嫌疑を蒙るに至つたのだとか、何とか、さういふたはいもないことだけを聞きました。

グロー　むゝ。そりや全く女が男を御する所から起つたことです。監獄へ貴下を送るのは王ぢやありませんや、妃の、元のグレー夫人エリザベスでさ。さういふ思ひ切つた事を王にさせるのはあの婦人です。現に、あのヘスチングスを……けふ出獄するあの卿を……讒訴して獄へ入れたのは、あの婦人と其兄の、あの立派なお役人のアントニー・ウッドギルぢやありませんでしたか？　クラレンス兄さん、お互ひに危うごすぜ。油斷はなりませんよ。

クラレ　全くだ。妃の親戚か、で無けりやあのショーア夫人と王との間の眞夜中の使ひを勤める者の外は、だれ一人だつて、安全だとはいへない。ヘスチングスは、今度放免になるためには、怖しく身を下して、あの婦人に縋つたといふぢやアないか？

グロー　さア、我侍從卿は、全く、平身低頭してあの女神を拜み奉つたお庇で自由を得たのです。ねえ、兄さん、王の恩寵を失ふまいといふにア、あの婦人の御家來になつて、制服を頂戴に及ぶに限りますよ。あの邪推ぶかい後家婆さまとあの婦人とは、王が彼等を貴婦人扱ひになすつて以來、此王國切つての、すばらしい羽振の金棒仲間ですからね。

二人の談話が切れないので、やゝ立離れてゐた監督官が口を出す。

ブラケ　失禮ながら、お兩方に申しあげます。陛下は、此際、どういふ御身分のお方であらせられましても、内々でクラレンスさまと御會談をおさせ申しては相成らん、と嚴しいお吩咐でございましたので……

グロー　ふん、成程。（皮肉に）ねえ、ブラケンベリーさん、なんなら閣下が私たちの言つてることを、そつくり其儘聞いてッて下すつてもかまはんよ。決して謀叛めいたことを言つてるのぢやないんだから。王は賢明で德が高い、お妃は大ぶお齡は取られたが、美しくて邪推ぶかくはない、と然ういつてるのだ。それから、ショーアの細君の足はいかにも可愛らしい、唇は櫻實のやうだ、目附が快活で、辯舌が非常に愉快だといつてるのだ。それから、お妃の親戚は貴族になられた、と然ういつてるんだ。え、それが如何だといふのだ？　何か異議があるかい？

ブラケ　いえ、御前がたに對して、どうかうと申すのぢやございません。

グロー　ぢや、誰に對して？　よもや足下はあのショーア夫人に對して彼此苦情をいひ得るやうな仲ぢやあるまい？　公然にそれの出來る者は、天下にたつた一人しかない筈だ。

ブラケ　だれでございませう？

グロー　亭主よ、無論。……おれを鎌に掛けようとするのか？

ブラケ　御立腹では恐れ入りますが、どうか公爵さまと御内談の儀は御勘辨を願ひたいもので。

クラレ　ブラケンベリー、職務上、嘸迷惑であらう。ではおとなしく止めませう。

グロー　此方らはお妃の下郎だ、何でもおとなしくするより外に爲やうがない。……兄さん、さやうなら。これから王の許へ往きます。貴下のお賴みである以上、貴下を救ふ爲になら、何でもしますよ。あの後家さんを、隨分、お姉えさまとだツても、呼びますよ。けれどもねえ、此兄弟らしくもない、

酷い爲向けは、わたしや實に慨歎に堪へない、貴下の想像以上に。

クラレ　そりや無論わたしだつても不平さ。

グロー　ですが、長くは貴下を獄中にや置きませんよ。きつと我等が救ひ出す、でなけりや身代りになります。ちッとの間忍耐してゐて下さい。

クラレ　是非に及ばない。さやうなら。

クラレンス、ブラケンベリー、護衛ら入る。

グロー　（後影を見送つて）さ、二度とは歸らん路を歩いておいで、眞正直な、お心よしのクラレンス！　予はお前さんが可愛いから、一日も早く天堂へ靈魂を送り届けてあげたいと思つてゐる、天の方で受取つてさへ下されア。……（一方を見て）だれだ？　けふ放免になつたヘスチングスか？

ヘスチングス　卿出る。

ヘスチ　これは〳〵、御機嫌よろしう！

グロー　や、侍從卿、貴下にも御機嫌よう！　先づ以て御出牢でおめでたう。さて、どうお暮しでした？

ヘスチ　囚人の習ひ、只もう肅と蟄してゐるより外にいたしかたは無かつたのです。ですが、いづれ、あゝいふ目に逢はせてくれた人達へは禮をいふ積りでをります。

グロー　無論、々々。クラレンスとても然うするでせう。つまり

貴下の仇敵である手合が彼れの仇敵でもあるのです。　御同様に彼奴らにやられたのです。

ヘスチ　淺ましいことです、鷲が籠へ押込められて、鳶や野鷹が勝手に餌をあさつてゐるといふのは。

グロー　時に、何か新聞をお聞込みですか？

ヘスチ　さア、王が御不例だといふわるい新聞の外には、何にも。　大層お弱りで、ひどくお鬱ぎなので、侍醫一同が非常に憂慮いたしてをると承はりました。

グロー　セント・ボールー！　いかさま、それはわるい新聞です。　あゝ！　王は大ぶ久しく不攝生をつゞけてをられたので、非常に玉體を害されたのです。どうも歎かはしいことだ。・・・・え、では、臥てをられるのですか？

ヘスチ　さやうです。

グロー　ぢや、お先へおいで下さい、わたしも後から行くから。・・・・

ヘスチングス　入る。

（獨りになつて）迚も生きちやアゐまい。　が、あのジョールジを早馬で天へ屆けツちまふまでは、死なせちや具合がわるい。　これから往つて、道理らしく、鍛ひ上げた虚言をいろ〳〵並べて、ますま〳〵あのクラレンスを憎ませる。予の此陰謀が旨く行きや、クラレンスの命は今日限りだ。　それさへ濟めア、王は、神さま、どうぞお慈悲に、すぐお引取下さいまして、あとの天下は手前にお任せ下さいまし！　さうなりや予はウォーリックのあの末女を娶ることにする。　彼女の夫も、彼女の父も、予が手にかけて殺したのだが、かまつたことはない。　父兼帶の夫になつてやる方が、手取早い辨償法といふものだ。　さうするのは、奴に惚れてるからぢやアない、其結婚を手蔓に手に入れようと思ふ祕密の目的物があるからだ。　が、今はまだ、買主ばかりが馬市へお出掛といふ格だ、馬はまだあッちにゐるんだ。　クラレンス

はまだ生きてゐるし、王もまだ生きてゐて、君權を握つてゐる。あれらがゐなくなつてからでなくちやア、予の利得の勘定は出來ない、

入る。

第二場　同前　他の街上

グロースターの爲に先頃ロンドン城内で非業の死を遂げたランカスター家のヘンリー王の葬儀を行はうといふので、其太子エドワードの妃であつたアン姫（「王の製造者」と呼ばれた有名なウォーリック伯の二女）が、喪主となつて、宰領して故王の遺骸を收めた柩を擔ぎ荷はせて出る。　戟（斧の附いてゐる槍）を持つて多勢の護衛の武士が從いて出る。

アン　おろせ、そこへおろせ、やんごとないお方の其柩を。　柩にお收め申せばからとて、やんごとない御名譽には變りのない、其ランカスター家の大君の非業の御最期を、こゝで暫らくお吊ひ申したいから。……

柩を地上におろすと、その傍に立寄つて

傷しい、冷鐵のやうなお姿！　ランカスター家正統のお血統とは名ばかり、血の氣もない眞蒼な御遺骸！　どうぞ此アンが、……陛下に此傷を負はせました其同じ刃で果られた御最愛のエドワードの妻のアンが、……御亡魂を驚かしてお訴へするのが不法なことではなうて、どうぞ此歎きをお聽下さいますやうに！　あゝ、お命をば脱け出させた此幾つもの窓口へは、幾ら此目から熱湯を注ぎ込んでも效はないか？　こんなに無慚に斬りさいなみをつた其手が怨めしい！　こんな殘忍なことをしをつた其殘忍な心が怨めしい！　此貴い血を亡くさせ申した其人畜生めが怨めしい！　陛下を殺し、わたしを不幸な身にならせをつた人畜生め、おのれの

身の上には、蜘蛛や蝦蟆や蛇や蝮や有りとある厭アな這蟲共の上に落ちかゝりをれと願ふ以上の惡運が降りかゝれ！　彼奴が子を有つなら、其子は、月足らずで、化物のやうな見ッともない姿で生れて、樂みにしてゐた母親を只一目でおびえさせ、生長うなつては、非道な父親の根性を其まゝに受繼ぎをれ！　又妻を迎へをるなら、其妻は、わたしが夫に死別れ、陛下に死別れて不幸となつたやうに、彼奴めに死別れて難儀をしをれ！　……さアさア、チャートシーへやつとくれ。　わざ〳〵セント・ポールスからお伴したのは、あそこへ埋葬がしたいからです。　……けれども、まだ草臥れてるなら、もッとお休み、其間、わたしは尙お哀悼申してゐようから。

人夫が柩を擔ぎあげて先に立つ。警護の武士らも練り出さうとする。此途端グロースター公爵リチャード出る。

グロー　（止めて）まて〳〵、其柩、待て。　おろせ〳〵。

アン　（グロースターを認めて）　まア！　どこの怖ろしい魔法使ひめが、あんな惡魔をば禱り出しをつて、此神聖な葬儀の邪魔をしをるのか？

グロー　えい、下郎ども、其死骸をおろせ！　おろしをらんと、おのれ、片端から死骸にするぞ！

一武士　どうかそこをお退き下さいまし。　お通し下さい。

グロー　無禮者が！　汝こそ退け、おろせといつたら。……

武士が戟を構へる。

やい、其戟を、予の此胸元へそんな風に突附けをると、忽ち脚の下に叩きつけて、蹴飛ばしてくれるぞ。　おのれ、無禮千萬な乞食野郎め！

武士ら恐れて退る。

アン　（武士らを見返つて）おや、お前たちは慄えてるの？　怖いのかい？（皮肉に）成程、無理もない、お前たちは人間だ。　人間である以上、惡魔は怖い筈だ。……

（グロースターに）やい、去ッちまへ、黒闇地獄の大惡魔め！　此君の生きてゐ在の頃のお肉體は、おのれめが自由にしをつたけれども、貴いお靈魂は、おのれがどうすることも出來んぞ。だから、去ッちまへ！

グロー　まア〳〵、女菩薩！　美しい女聖者！　お慈悲です、そんな酷いことをおつしやるな。

アン　怖ろしい鬼め、惡魔め！　神さまのお爲だ、去ッちまへ！　祟をしをるな。此幸福な人間界が、おのれのお庇で、阿嗚叫喚の地獄も同じになつてしまつた。やい、おのれの大惡行の標本が見たければ、これを見い、此むごたらしいお姿を。……　おゝ、皆の者、御覽々〳〵！　王のお遺骸の傷口が、ついぞ今がたまで、血が乾き切つて凝り着いてゐたのに、あれ〳〵、口が開いて、血が流れる！……　恥を知れ、恥を知れ、おのれ、見ッともない不具者め！　此冷切つた、血の氣のない筈の脈管から、こんなに血が流れるのは、汝がそこにゐればからちや。おのれの奇怪不思議な惡行が、こんな不思議を見せるのぢや。おゝ、此血をば下されました神さま、讐を復つて下さいまし！　おゝ、此血を吸込む大地よ、讐を復つてくれ！　天よ、雷光で此殺人者めを打殺して下され！　地よ、口を開いて、此奴めを生呑にしてしまつてくれ、おのしが今、こいつの爲に無慙な最期をお遂げなされた此王の血を呑込んでゐるやうに！

グロー　姫さん、あんたは慈悲の法といふものを御存じがない。惡には善を以て、怨みには德を以て報ゆるといふことを。

アン　畜生、おのれは神の法はもとより、人間の法をも知りをらん。おのれは慈悲といふことを知りをらん、どんな野獸でも幾らか慈悲を知つてをるのに。

グロー　なるほど、わたしは慈悲を知らない、だから野獸ぢやァありませんや。

アン　おゝ、ま、何て不思議なこッたらう、うそをつく筈の惡魔めが本音を吐きを

つた！

グロー　不思議といふのは貴女ですよ、優しくつて而して可愛らしかるべき筈の天女さんでせう、それが怖い顔をして怒鳴るのだから。　ねえ、わたしは貴女を天使とも女神とも崇拝してゐるんですよ。　そんなに一概に叱らないで、わたしに十分いひわけをするだけの餘裕を與へて下さい。

アン　（激して）いゝえ〳〵、わたしはお前を惡魔とも化物とも賤しんでゐます。そんな好い加減なことを言ひぢる暇に、わたしに十分惡口をいはせてくれ。

グロー　（おちついて歎願的に）口では言ひ盡されない程に美しい姫さん、どうぞ少うしの間です、いひわけを聽いて下さい。

アン　（いよ〳〵激して）考へにも想像にも及ばない程に醜惡い惡漢め、首でも縊りをらんうちは、いひわけしても無效ぢや！

グロー　そんなことをすれァ自暴自棄です、自ら求めて罪人になるのです。

アン　いゝえ、さういふ自暴自棄でもしなければ、お前の罪は消えません。　我れと我手で當然な懲罰を下してこそ、他人に無法な虐殺を加へた罪が消えるのぢや。

グロー　若しわたしが殺したのではないとしたら？

アン　無いとしたら、生きてお在の筈ぢや。　けれども、畜生め、おのれのお庇で、みんな亡い人になつてしまひなされた！

グロー　決してお所夫を殺しはしない。

アン　ぢや、夫は生きてゐる。

グロー　いゝえ、なくなつたには相違ない、エドワードの手に罹つて。

アン　此大うそつきめが！　夫の血で血煙を立てゝゐたおのしの其殘虐な劒を見たあのマーガレットどのが證人ぢや！　あのお妃をも、お兄さんたちが止めなさらなんだら、おのしは疾に刺し殺してしまひをつたのぢや。

グロー　實は、あんまり酷く惡口されたので、つい、その、堪へかねたのでした。

アン　おのれの持前の、其、人殺しをしたがる根性が堪へかねたのだらう。……ぢや、此王をも殺さないといふのかい？

グロー　それだけは是認しますよ。

アン　是認する？　おゝ神さま、どうぞ此大惡人めの地獄へ墮ちますのをお是認下さいまし！　おゝ、此王は、優しい、溫厚な、德の高いお方であつたに！

グロー　下界の王たるよりも天上の王たるに適した人だつた。だから、天へ上つて、恰ど適所を得たわけです。

アン　おのしなんかは決して天へは上れない。

グロー　其天へ上らせてあげたのはわたしですよ。

アン　おのしなんかは地獄へしか行かれやしない。

グロー　いゝえ、もう一ヶ所ある。言へとおつしやれば言ふが。

アン　土の牢だらう？

グロー　あんたの閨です。

アン　えい、汚はしい！　おのしの閨には不安ばかりが宿りをれ！

グロー　姫さん、わたしはあんたと一しよに寢ないうちは不安です。

アン　不安けつこう！

グロー　全く不安です。……ですが、姫さん、もう警句問答は止して、もつと地味なお話をしませう。　ねえ、プランダジェネット家の正統であるヘンリー王やエドワード王子をば非業に死なすといふのは、首斬役も同然の酷い所行で、憎いのは其發頭人です。

アン　其發頭人も、實行者もお前です。

グロー　いゝえ、それを實行させた發頭人は貴女だ。寢ても醒めても、あんたの其美しい顏が忘れられないので、たつた一時でも貴女に抱かれることが出來

さへするなら、世界中の者をだッて、みんな殺しッちまはうと思ふやうになつたのです。

アン　假にもそんなことを知つてゐれア、此人殺しめ、わたしは此頰をば自分の爪で以て搔破ッちまつたらう。

グロー　とんだこッた、わたしが傍にゐりや、直止めッちまふ。わたしに取つちやア、あんたの其光り輝く顏は、まるで太陽です。あんたはわたしの晝だ、命だ。

アン　おのしの晝なんかは闇になッちまへ！　おのしの命なんかは亡くなッちまへ！

グロー　そんなに御自分をお呪ひなさるなよ、命てのは貴女のこッてすよ。晝てのも貴女のこッてすよ。

アン　あゝ、わたし其二つでありたい！　さうすれア直敵が討てるから。

グロー　崇拜してる者を敵扱ひはあんまり無法ですよ。

アン　夫を殺した奴を討たうとするのが、何で無法ぢや！

グロー　先のを殺したのは、もつと良い御良人をお世話しようと思つたからです。

アン　もつと良い夫なんぞが、此世にあらう筈はない。

グロー　ところが、現に在ります。

アン　姓をおいひ。

グロー　ブランタジェネット。

アン　そりやわたしの先の夫です。

グロー　同姓です、が、氣立は先の以上。

アン　何處にゐます？

グロー　こゝにゐます。....（と顏をさし出す。姫其顏へ唾を吐きかける）。....なぜそんなことをなさる？

アン　其唾がおそろしい毒液だとよいのに！

グロー　(徐かに顔を拭ひながら)そんな可愛らしい口から、毒液の出た例はない。

アン　蝦蟆の頭には毒が溜つてゐるといふけれど、こんな汚らはしい蝦蟆は見たことがない。　消えッちまへ。　目が汚れる！　毒が傳染る！

グロー　貴女こそ其美しい目の毒で、わたしを病人にしておしまひなすつた。

アン　一目見れば人を殺すバシリスクのやうな目があつたら、睨み殺してやるのに！

グロー　あゝ、一思ひにさうされたい、(と頬りに涙を流しながら)こんな風に半殺しになつてゐるより、貴女の目が、此目から鹽ッぱい水を誘き出して、小ッぱづかしい子供げな雨滴を、こんなに、ふんだんに落させた。　曾ぞ涙なんか零したことのない此目が……父ヨオクや兄エドワードが、あの物すごい顔色のクリッフォードの振下す劍の下で、憫れに唸くラトランドの聲を聞いて泣いた時にも、又貴女のあの勇猛なお父さんが、わたしの父の悲慘な死樣を話すとて、子供のやうに、二十たびも言葉を杜絶らせ、歔欷をして、傍の者までが堪へかねて、衆の頰邊が雨に逢つた杜の木の樣になつた時でも、そんな時にさへ、つひぞ卑屈な涙なんか出さうともしなかつた此男子の眼が、貴女の美貌には勝てないで、此通り、涙で以て盲も同然です。　此舌は、曾ぞ敵にも身方にも歎願なんかしたことアなかつたが、世辭や追從をいつたことアなかつたッけが、貴女が目的だとなると、此傲慢な心も折れッちまつて、つい舌に歎願をいはせるやうになる。……

姫は默つて、侮蔑の目で見おろしてゐる。

(跪いて)姫さん、そんな口附をなさるな。　貴女の其唇はキッスするために出來てるのだ、賤蔑む爲の道具ぢやアない。　ねえ、どうしても敵だとおつしやるなら、さ、此通り、拔劍を貴女に渡します。(と劍を拔いて、欄を姫の方へ向けて、差出しながら)これほどまでに思つてゐるのに、どうしても此胸を切裂いて靈

魂を引摺り出さうとおつしやるなら、この通り跪いて、自分で胸を開いて（と上被、下被の襟をくつろげて、赤裸々の胸を露しながら）謹んで死刑の御處分を受けませう。……

姫は拔劍を受取つて、彼れの胸に擬して見たが、どうも得しないでゐる。

いゝえ、躊躇なさるな。いかにもわたしはヘンリー王を殺したに相違ありません、けれども

それをわたしにさせたのは、貴女の其美貌です。いゝえ、さ、早く。王子エドワードを殺したのもわたしです、けれども、それをさせたのは、貴女の其天人のやうな美しい顔なのです。……

姫、劍をおとす。

アン　もう一度お取りなさい。で無きや、わたしのいふことを聽いて下さるか？

グロー　お起ち、此白ばっくれめが！　殺したいんだけれど、首斬役なんかにァわたし成りたくない。

アン　ぢや、自殺しろとおつしやい、やりますから。

グロー　それはもう先刻いッちまつた。

グロー　腹立まぎれにおつじやつたのぢやいけない。言ひ直して下さい。其言下に、貴女の愛人を殺した此手が、貴女を愛する餘りに、此上もない貴女の愛人を殺して見せます。だが、其下手人は貴女ですよ。

此間姫は段々説き惑はされて、おひ〳〵態度が變つてくる。

アン　（迷つて）お前さんの本心が知りたい。

グロー　わたしの心は、口でいつてる通りです。

アン　其口も、其心も、信ぜられない。

グロー　ぢや、世の中に、信實な人間はありァしません。

アン　いゝから、まァ、其劍をおしまひ。

グロー　ぢや、和睦したとおつしやい。

アン　それは今はいへません。

グロー　未來には望みがありませうか？

アン　とかく人間は未來を賴むものです。

グロー　ぢや、どうか此指輪を貰つておいて下さい。

アン　（躊躇しながら受取つて）貰ふのは與るんぢやないからね。（と言ひつゝ指にはめる）。

グロー　（歎息して）あゝ其指輪の中へ貴女の指が包み込まれたやうに、此心は貴女の胸の中へ封じ込められてしまつた。指輪も心も持つてゝ下さい。兩つとも貴女の有だ。序に、どうぞ、此無二の崇拜者の願ひを聽いて、たゞ一つのお惠みを施して下さい。それが自分の永久の幸福になるんだから。

アン　何ですの、それは？

グロー　どうか此御葬儀は、當然の哀悼者たるべき自分にお任せなすつて、貴女は直にクロスビー・プレースの方へいらしつて下さい。わたしは、チャートシーの清院で、此君の御遺骸を葬つて、懺悔の涙をお墓に注いでおいて、さうして大急ぎで貴女の許へ往きます。まだ御存じのない、種々な理由があるんだから、是非、これだけは聽いて下さい。

アン　（心が解けて）ようございますとも。貴下がそれほどまでに改心なすつたのを、わたし嬉しう思ひます。……（武士らを顧みて）トレッサルとバークリーは、わ

たしに從いておいでなさい。

と言ひすてゝ行きかける。

グロー　（止めて）「御機嫌よう」をいつて下さい。

アン　（見返つて）それほどには赦されません。けれども追從の言ひ方を貴下に敎はりましたから、御隨意に、もうそれはわたしがいつたのだとお思ひなさい、といつときませう。

姫、トレッサル、バークリーを從へて入る。

グロー　さァ〳〵、柩を擔上げろ。

武士　チャートシーへでございますか？

グロー　いゝや、ホワイトフライヤースへ。あそこで予の行くのを待つてゐてくれ。……

武士ら柩を警護して入る。グロースター獨り殘つて、北叟笑

をして

女をこんな鹽梅式に口說いて、しかも口說き落した例があるだらうか？

彼女を物にしよう。が、長く持つてゐる積りぢやァない。えッ！　夫をも父をも殺した予が、やッきと予を憎んで、呪つたり哭きわめいたりしてゐる最中に、血みどろの證據品までも、つい鼻の先に据ゑておいて！　神をも、彼女の良心をも、みんな向う方へ廻して、身方にや惡魔根性の僞善の外には何にもなくつてゝ、それでゐて彼の女を手に入れるとは！　只もん目で全世界を手に入れたも同然だ！……あの女は既うあの立派な王子エドワードを忘れッちまつたのか？　つい三月程前に、予があのチュークスベリーで、腹立ち紛れに、ずぶり刺殺してしまつたあの夫を？　あんな、造化の特製ともいふべき、年若で、勇敢で、恰悧で、無論王家の嫡々でもある、あんな可憐な美少年の貴公子は、世界中を探したつて、又とは有りァしな

い。それだのに、其可憐な王子の花の盛りを刈縮めて、彼女を不幸な後家にした予に靡かうといふのか？　一切がつさいを引括めて見ても、あのエドワードの半分にも足らない予に！　こんなに跛で、見ッともない予に？　たしかに予ア、從來は、自分の柄を見違へてゐたのだ。自分にや然う思はないが、彼女の目にア予が懷しい美男に見えるらしい。これア鏡を買つて、裁縫師の二三人も呼んで、ちッとおめかしを始めざなるまい。大ぶ自分と仲よしになりかけた、少々は費用をかけても、永續きのするやうにしよう。……が、先づあの男を墓場へ投込まう、それから泣ッ面をして情婦の許へ戻つて行かう。……太陽さん、照つてゐて下さいよ、鏡を買つて來るまでは、此いゝ格好の影の映つたのを、通りすがりに、見たいからね。

入る。

第三場　ウェストミンスターの王宮

現英國王エドワード四世の妃エリザベス（もとは故グレー卿の夫人）、妃の弟リヴース卿、妃がグレー夫人であつた頃の子息、今のグレー卿ら出る。

リヴー　お妃、お案じなさるな。陛下の御不例は、大丈夫、今に御全快なさいませう。

グレー　あなたがそんな風にしていら

つしやると、却つて陛下のお加減に障ります。快活に、陽氣に王をお慰めなさる方がよろしい。

だつて、若しお亡くなりにでもなつたら、わたしは如何なるでせう？

リヴー　あゝした御良人をばお亡くしなされたといふだけの御不幸です。

妃　あゝいふ夫を亡くするのは、此上もない不幸です。

グレー　幸ひにも、天のお惠みで、立派な王子があらせられるのですから、假令王がお亡くなりになつても、お慰めはあります。

妃　おゝ、だつて、彼兒はまだ幼少なんだから、萬事あのグロースターのリチャードに任せッ切りです、わたしにも、足下たちにも、好意を有つてゐないあのリチャードに。

リヴー　あの男が攝政と確定したのですか？

妃　内定になつてはゐますが、まだ公認されてはゐません。けれども、王が萬

一の場合には、きつと然うなります。

（バッキンガム卿とスタンリー卿と出る。）

グレー　バッキンガム卿とスタンリー卿とが見えました。

バッキ　殿下の御好運を祈り奉ります！

スタン　舊に依つて、お歡樂のます／＼ゆたかならんことを！

妃　スタンリー卿、御親切に。しかし令夫人の、舊のリッチモンド伯夫人は、貴下の其御深切なお祈りに對して、おそらくアーメンとは申されますまいよ。けれども、あの夫人が、どんなに氣位が高くて、無作法で、わたしに惡意を持つておいでゝも、ねえ、スタンリー卿、わたしは決して貴下を惡くは思つてゐませんよ。

スタン　どうか、讒誣者共の惡意で申し立てますことなぞは、御信用になりませんやうに。或は、實際妻に何か不埒がございますやうならば、どうか御勘辨下

さいますやうに。　畢竟それは彼女の持病が募らせました我儘の故でございまして、決して深い惡意なんぞがあつての事ではないと存じますから。

リヴー　時に、スタンリー卿、あなたは今日、王に御拜謁なさいましたか？

スタン　ちようど只今、バッキンガム公と共に、お見舞申し上げて參つたところです。

妃　癒りさうに見えますか？

バッキ　至極よろしい御容體です。　お元氣なお口振でございました。

妃　どうか平癒せられますやうに！……お話をなすつたのですか？

バッキ　はい、さやうです。　王は、グロースター公と貴女のお兄弟がた、又、あの方方と侍從長へスチングスどのとのお間柄を、此際どうか調停したいものだと仰せられまして、右の人々へお召のお使ひを遣されました。

妃　さういふ風に終結るものなら、ほんとに結構です！　けれどもそれは叶ひますまい。……わたしたちの幸福は、今がもう極點らしい。

と歎息する。

グロースター公爵リチャード、侍從長ヘスチングス及び妃の（先夫の）子息ドオセット侯爵の三人、何か話をしながら出る。

グロー　（激昂した口吻で）そりや讒誣といふもんだ。　もう堪忍はならん。　わたしが峻酷で、あの手合を憎んでるなんのと、王へ讒訴したのは誰だ？　セントポール！　そんな葛藤の種を王の耳へ蒔く奴らは、つまり陛下に不忠な奴らだ。　おれが巧言令色をして、人の顏さへ見れア莞爾いて、たらしたり、騙したり、賺したりして、佛蘭西流にぺこ〳〵と辭儀をして猿猴の眞似をしないからつて、おれに惡意があるなんぞと、敵視するのア如何いふわけだ？　眞正直に世を渡らうとすると、柔弱けた、わる猾い、猫撫聲の下司共に、忽ち讒訴されなくちやアならないのか？

わざとリヴースへ當附けるやうに言ふ。

リヴー　（グロースターに向つて）此列席中の、だれにそれをおつしやるのです？

グロー　足下にいふのだ。足下は廉恥心のない男だ。何時わたしが足下に損害を與へましたり……（スタンリーに）いつ足下に？（ドオセットに）いつ足下に？（妃に）又は貴女に？　貴女たちの仲間のだれに？　時疫に罹れ、足下たちは悉皆！　王陛下は……あゝ、どうか足下たちが願ふ以上にお長壽であるやうに！……足下たちが下劣な讒訴なんかお聞かせするから、息をなさる間だけも安穩にしてお在なさることが出來ない。

妃　グロースターさま、貴下は誤解しておいでゝす。王は、訴訟者の入智慧ではなく、御自身の分別で貴下をお呼びなされたのです。わたしやわたしの親族縁者に對しての貴下のお仕向けを御覽じて、何か深い仔細が貴下のお心に在るだらうと思しめしたのです。お會の上で、其御不快の仔細をよう聽いて、それを除きたいと思しめしたのでせう。

グロー　物がいへない。世は末になつた。鷲さへも捿り得ない處で、鵲鷂が餌をあさつてゐる。下司が紳士になつてからは、紳士が多勢下司になつた。

妃　グロースターさま、貴下の御趣意はよく解つてますよ。貴下はわたしやわたしの周圍の者の立身を嫉んでいらつしやるのです。行末とも、どうか貴下のお世話にはなりませんやうに！

グロー　ところが、わたしたちは、足下たちのとんだお世話になつた。先づ兄のクラレンスが、足下たちのお庇で、牢へ入れられる、わたしは御不興を蒙る、貴族一同は侮辱を受ける。それだのに、つい二三日前までは、一ノーブルの價格もなかつた手合を貴族にするために、毎日のやうに叙爵沙汰が行はれる。

妃　決して出世なぞを望んではゐなかつた境遇から、今の此苦勞の多い身となつたのは、悉皆神様の御意です。其神さまを誓言に掛けて、わたしはあの

クラレンスさんを熱心に辯護をしたとはあるけれど、決して讒訴した覺えはありません。公爵、貴下はあんまりな誣言をなさいます、そんな卑劣な嫌疑をわたしにお掛けなさるのはあんまりです。

グロー　ぢや、ヘスチングス卿の此間中の入獄も貴下の故ぢやないと言ふんでせう。

リヴー　それは、無論、妃殿下の故では……

グロー　え、故ではない！　さうも有りませう！　此婦人は、隨分種々な旨い地位へ足下達を推擧することに骨を折つておきながら、關係しなかつたやうな顔をして、あれは全く足下たちの功勞才德の自然の報酬だなぞと言ひ觸らしかねないからね。　そんなことは平氣でなさる質だ。　のみならず、隨分その隨分……

リヴー　隨分、その、何をしかねないといふのです？

グロー　さア、再緣をなさりかねないね、齡の若い獨身の王さんの許なんぞへ。……

妃　足下のお祖母さんは、ずッと御亭主緣がわるかつたやうだねえ？

グロースター公爵、わたしは足下の雜言や嘲弄を、もう久しく堪へ過ぎてゐたくらゐです。　此上は、こらへ〳〵て來た其無法な御侮辱の一切を陛下へお知らせします。　こんな淺ましい侮辱を受けて、嘲弄され、凌虐されて、妃殿下と崇られてゐるより、田舍家の下司女となつた方が優しです！……

此時、背後へ故ヘンリー六世王の未亡人、老妃マーガレット出る。

英國王の妃となつてゐたからつて、ほんの僅かの悅樂しかありアしない！

と怒り歎く。　それをマーガレットは快げに見やりて、

マーガ　（傍白）おゝ、神さま、その僅かの悅樂をも、もつと〳〵少くしてやつて下さい！……お前の、其身分や位や名譽は、もとは悉皆おれの有だ！

グロー　（妃に）何ですと！　王にわたしの事を言ひ附けるといふんですか？　お言

ひ附けなさい、御遠慮なく。　ねえ、わたしが今言つたことは、王の面前でだつて、斷言しますよ。　ロンドン城へ入れられる位ゐは平氣です。　もう言はないぢやゐられない。　わたしの功勞は、まるで忘れられッちまつた體だ。

マーガ　（蔭で切齒して）おのれ、人鬼めが！　何の、其功勞を忘れるものかい！　夫のヘンリー王をば汝があのロンドン城内で殺しをつた。　我子の、あの憫然なエドワードをもチュークスベリーで殺しをつた。

グロー　（妃に）あんたがまだ妃にならず、王がまだ王でなかつた時分にや、わたしは、王の爲に、駄馬の役までもしたもんだ。　王の爲に、其傲慢な敵を取挫ぐ、王の身方には惜し氣なく褒美を振撒く、つまり、王を王の血統らしい人にする爲に、自分の血を流すのをば厭はなかつたんだ。

マーガ　（蔭にて）さうだ、汝や彼奴のよりもずッと貴い血をば流させをつた！

グロー　（妃に）其間貴女や貴女の夫のグレー卿は、始終敵のランカスター家へ一味してゐた。　リヴース、足下も然うだつた。　現に、貴女の夫は、セントオルバンスの戰爭で、あのマーガレットの旗下に屬してゐて、討死したんでせう？　若しそれをお忘れなら、貴女は昔は如何で、今は如何、といふことをお知らせしませうか？　同時に、過去のわたしと現在のわたしの說明もしませうか？

マーガ　（蔭にて）殘虐な殺人者だおのしは、現在も過去も！

グロー　（妃に）兄のクラレンスが舅のウォーリック伯に背いたのは……これァ耶蘇も御諒恕なさるだらうが！……

マーガ　（蔭にて）それをば神さまがお罰しなさる！

グロー　ひとへに長兄のあのエドワードに王冠を戴かせたいが爲であつた。　それだのに、其功勞に對する報酬があの牢獄だ。　あゝ、此わたしの心が寧そ王

のやうに酷薄になるか、又はあの王の心が、わたしのやうに、やさしく慈悲ぶかくなればだがなア！　おれは、此世に處するにア、あんまり子供氣に馬鹿正直なんだ。

マーガ　（蔭にて）ぢや、此世を捨てゝ地獄へ往きをれ、恥知らずの惡魔め！　地獄が汝の領分だ。

リヴー　グロースター公爵、貴下がわたしたちを敵であつたぢやないかとおつしやる其内亂時代には、成程、わたしたちはヘンリー王に隨順してゐました。ヘンリー王が吾々の正統の君であつたからです。若し貴下が王であつたら、吾々は貴下に隨順したでせう。

グロー　なに、若しわたしが王であつたなら!?　とんでもないこッた。寧ろ行商人にでもなつた方が可い。夢にも思はんこッた！

妃　貴下は王の身分を羨ましいものとはお思ひでないやうだが、妃の身分とても、其通りだとお思ひなさい。

マーガ　（蔭にて）いかにも其通り。現におれの此有樣！……もう〳〵忍耐が出來ない。（と前へ進み出て）やい、おのしら、贓品の事で言ひ爭ひをしをる海賊めら、その代物は悉皆おれの許から引奪つて行きをつた物ぢやないか？　やい、一人でも、予の顏を見て、慓えずにをられる奴がゐるか？　おれをお妃さまと崇めて、臣下らしく平伏するか、又は非義非道に排退けた前の正統のお妃樣として戰慄するか、謀叛人めら？……（グロースターが冷然として退場しようとするのを見て、皮肉に）おゝ優しい惡黨どの、おい、逃げなさんな！

グロー　見ッともない魔法使ひの婆さん、お前さんは何を爲にこゝへ來たんだ。

マーガ　おのしらが破壞しをつた其品數を算へ立てに。おのしらを手放す前は、是非とも、繕ひ直しをする積りだ。

グロー　いつぞや追放された時分に、お前さんは、見附かると命がないと言ひ渡さ

れてゐたぢやないか？

マーガ　あゝ。だが、外國で見附かつて殺された方が可い、追放されてゐるより。

（グロースターに）夫一人、子一人が汝には貸してあるぞよ。それから王國が一個。・・・（一同を睨み廻して）どいつにも、こいつにも、忠順の誓約が。おれの此不幸は當然おのしらの物、又、おのしらの奪ひ取りをつた幸福は、みんなみんなおれのものだ。

グロー　父ヨオクの公爵がお前を呪つた言葉が、とうゞ身に報いたのだ。お前が紙の王冠を製つて、それを父の頭に載けて、さんゞに侮辱したんで、父が悔し涙を流すと、それを拭けと言つて、お前が、あの何の科もない、可憐けなラトランドの血で染まつてゐる手巾を父に渡した、・・・其時、無念骨髄に徹して、父がお前を呪つた。其應報が來たのだ。吾々ぢやアない、神がお前の殘忍をお罰しなさるのだ。

妃　（深く感じた體で）神さまは公平であらせられるから、無罪の者は必ずお助け遊ばす！

ヘスチ　あんな幼弱な者を殺すなんぞといふは、實に古今無類の殘忍な所行です！

リヴー　あの知らせを聞いた時には、どんなに無慈悲な者でも泣きましたよ。

ドオセ　此讐はきッと復れると豫言しないものはありませんでした。

バッキ　居あはせたノオサンバランド公の如きも、覺えず貰ひ泣きをせられました。

マーガ　（衆を睨んで）まア！　おのしらは、予が出たまでは、喉笛を摑み合ひさうにして、互ひに吠えかゝつてゐたぢやアないか？　それだのに、衆が一しよになつて、予に嚙附かうとするのか？　あのヨオクめの呪ひが、それほど天堂で受けが好いのか？　夫を殺された上に、可愛い子を殺され、王國をも奪られ、慘な追放の身と迄なつてゐる予の此不遇は、みんなゝ、あの癡小びッちよ只た一人ぐらゐ殺した罪の報いだといふのか？　え？　呪ひさへすり

や、それが雲を突裂いて、天までも達くのか？　ぢや、予も呪つてくれる。
さ、阿呆雲め、退きをれ、すさりをれ！……こちの王を虐殺して國王となりをつた汝等の王のエドワードめ、若し戰場で死なゝけりや、暴飲暴食の爲にくたばりをれ！　（妃に）今太子と立てられてゐる汝の子のエドワードめ、前の太子の、おれの子のエドワードと同じに、子供のうちに人手にかゝつて死んでしまへ！　妃の汝は又、妃であつた此おれの罰が當つて、零落れて死にもやらず、おれと同じに、慘な目を見をれ！　子供らの死後までも生き存へて、泣き悲しんで、汝が予のを奪ひ取りをつたと同じに、汝の位を奪ひ取つて威張り返つてゐる其女の面を見る時まで生きて居をれ！　汝の息のあるうちに、ありとある幸福は亡くなつてしまへ！　さうして、辛い、淺ましい、長い月日の後に、もう王妃でも、母でも、妻でもなくなつてしまつてから死にをれ！……やい、リヴァース、ドオセット、おのしらは、……へ

スチングス、こなたとても、……我兒があの殘忍な短劍で突殺された時に、傍にゐて、見す〳〵、救けようともしなかつたといふことだ。　おのれらは、一人だつて、壽命で死なせるこッちやないぞ。　おゝ、神さま、こいつらを非業な目に逢はせてやつて下さいまし！

グロー　もう止せ、止せ、呪文は止せ、厭な、皺くちやの魔法つかひめ！

（グロースターが退場しようとするのを止めて）

マーガ　汝のを遺してならうか？……まて、畜生め、待ちをれ、聞かすことがある。……若し天上に、おのしの身に降りかゝれと豫々おれが願つてゐた以上の何かおそろしい大疫病かなんかがお貯へになつてありますものなら、それをば、此奴の罪惡が熟し切つてしまひますまでは、わざと取置かせられ、最後にお赫怒あつて、此世の攪亂者たる此奴の頭上に、一度期に、お降し下されますやう！　良心の蝎の牙は、しよつちう汝の靈魂を咬め！　無二の親

友をも、二心のある者と死ぬ間際までも疑つて、腹黒な奴等をば、無二の親友と思ひ込みをれ！　汝の其目は、夜もろく〳〵閉がれずにをれ、閉げば、必ずのやうに、惡鬼羅刹に責められる怖ろしい夢を見て魘れをれ！　おのれ、魔の印の附いた、大不具の、土ほじりの猪め！　生れ落から奴隷と烙印おされ、地獄の子と極めをつけられ、生んだ母には恥を與へて、父親には憎まれをつた、うぬ、名譽の家柄の襤褸屑め！　おのれ、いやな、憎い〳〵……

リチャードめと言ひかけるを

グロー　（急に横合から）マーガレット。

と「憎い〳〵」といふ形容詞に恰當するやうに言ふ。と、只ほんの一二秒後れて

マーガ　リチャード！

と調子高に叫ぶ。と

グロー　（呼びかけられたらしく）え？

と白ばッくれる。

マーガ　（激して）おのれを呼んだのではない。

グロー　（尚白ばくれて）あゝ、さう、これは失禮。先刻から惡口を並べてゐなさるのは、わたしへ對してのことかと思つた。

マーガ　勿論、さうだ。けれども、おのれに返辭をしてくれといひはしない。……おゝ、いひかけた呪ひをいつてしまはう。

グロー　それは既うわたしが言ッちまつた。マーガレットといふ一言で終んでゐるのだ。

これにて皆々マーガレットの顏を見て笑ふ。

妃　（マーガレットに）自分で自分を呪つたやうな次第になるわね、お前さんは。ほゝゝゝ！

マーガ　（妃を睨んで皮肉に）おい、慘な畫にかいたお妃さん、見た目ばかりの、おれの過

去の幸運の片影どの！　お前は何故その毒蜘蛛へ、甘い砂糖なんか撒いてやるのだ？　今現にお前を怖ろしい網で捉まへようとしてゐるぢやないか？　馬鹿、馬鹿！　自分を殺すナイフを磨いでるのだよ　お前は。　今に見ろ、其傴僂の蝦蟆を、手傳つて呪つてくれとおれに頼みに來る時が來る。

ヘスチ　出放題なことを！　大概にして狂氣めいた呪ひを止めんと、お前さんの爲にならんぞ、吾々の堪忍袋の緒が切れるから。

マーガ　この馬鹿者めら！　おのしらこそおれの堪忍袋の緒を切つたのだ。

リヴー　あなたを正當に取扱ふ段となると、貴女はさうしちやゐられますまいぞ。

マーガ　おれを正當に取扱はうといふには、汝らこそ然うしてはゐられないのだ。おれはお妃樣だ、おのしらは臣下だ。　おゝ、おれをば正當に取扱つて、みんなそこへ平伏しをれ！

ドオセ　（皆々に）論をするのはお止しなさい。　あの人は狂人です。

マーガ　（ドオセットにわざと皮肉に）お默り、侯爵どん！　無禮ですよ。　やつと造幣から出たばかりでは、爵位も通用しかねるよ。　おゝ、成上りのおのしらに、位爵を失くして零落れた者の慘さを思ひ知らせてくれたい！　高木は幾たびも暴風に惱まされる、さうして倒れたりといふと、めちやくに折れて碎けてしまふ。

グロー　（ドオセットに）結構な教訓です。　侯爵、よう記えておきなさい。

ドオセ　わたしばかりぢやアない、閣下の御參考にもなりませう。

グロー　さやう、それ以上にも。　だが、わたしだけは格別だ。　荒鷲の雛は杉の梢に巣をくふ。　風も目の下だ、太陽も目の下だ。

マーガ　（きつと見返つて）さうして太陽をば蔭にしをる。　おゝ、悲しやくー！　此國の太陽とも仰がれる筈の予の子をば、おのれめが殘忍非道の雲霧で永久の闇の中へ葬つてしまひをつた。　汝らは予の雛の巣を奪取りをつて、うぬ

が雛を育てをるのだ。　おゝ、神さま、それをば御覽じてござるなら、打棄つておいて下さりますな。　血で奪つた物は血で失くさせて下さいまし！

バッキ　もうお止しなさい！　好意は有たんにしても、せめて恥をお知りなさい。

マーガ　（リチャードらに）何の恥！　何の好意！　おのしらは、惡意の限りを、破廉恥の限りを予に對してしたぢやアないか？　暴虐がおのしらの好意だ。　生きてるのが予の恥だ。　此生恥の悔しさが、どうして忘れられるものか！

バッキ　もうお止しなさい、もうお止しなさい。

マーガ　おゝ、バッキンガムどの、お前さんの手をキッスしませう、お前さんとは仲よしだといふ證據に。　お前さんの一族には幸運下れ！　お前さんの衣服はわたしらの血で汚れてはゐない。　わたしの呪ひはお前さんには及ばん。

バッキ　他の人々にもです。　室外で呪つたのは驗がないといひます。

マーガ　そんな筈はない。　きつと天までも達いて、神さまの御安眠をも驚かすに

相違ない。　おゝ、バッキンガムどの、あの犬畜生めに警戒をなさい！　あいつは尻尾を振つてゐながら咬付く。　咬付いたりといふと、齒の毒が怪我人を殺さないではおかん。　あいつに關係なさるな、警戒なさい。「罪」や「死」や「地獄」が彼奴を書入にして、始終惡魔を附屬はしてゐるんだから。

グロー　（冷然と見返つて）バッキンガム卿、婆さんは何を言つてるのです？

バッキ　なアに、たはいもないことをです。　取るに足りません。

マーガ　（憤激して）なに？　折角忠言をしてやるのに、おのれ、馬鹿にしをつて、現在警戒しろと言つた其惡魔に追從しをるのか？　おゝ、おのれ、よう記えといて、其奴の爲に心臓を引裂かれをる時、あゝあのマーガレットが豫言をしたつけと吐かしをれ、うぬ！　汝等は彼奴に、又、彼奴は汝等に憎がられ、さうして、どいつもこいつも、神さまに憎がられて生きてゐをれ！

マーガレット一同を睨め廻し、呪ひながら入る。

ヘスチ　わたしは、あの呪ひで、身の毛がよだちました。

リヴー　わたしも。　あの婦人を放任しておくのは、どうしたといふのでせう。

グロー　（今までとは打つて變つて、しんみりとした調子で）いや、無理もない。　實際さんざな目に逢つたのです、あの婦人は。　わたしも、今となつては、その事に携はつて、あの婦人を苦めたのを後悔する。

妃　わたしは、如何いふことをも彼婦人にした覺えはない。

グロー　だつて、つまり、あの婦人の不幸が原で、足下たちは出世をしたのだ。　わたしは、餘り或人の爲ばかり思つて、つい行り過ぎてしまつた。　而も其人は、もうそれを忘れッちまつてる。　あゝ、クラレンスは好い報酬を貰つた。骨折の褒美に豚小屋へ收れられて、これから御馳走にありつかうといふのだ。　神さま、どうか其發頭人共をお赦し下さい！

と眞實らしく祈る。

リヴー　（感心して）仇敵のために冥助を祈るといふのは、いかにも君子らしい、基督信者らしいなされ方だ。

グロー　こりやわたしの常例です。……（といひながら傍白）じつと考へた結果だ。　今こゝで呪ひ立をしちや、自分を呪ふやうなもんだから。

士爵ウイリヤム・ケーツビー出る。

ケーツ　お妃、陛下がお召です。　それから（とグロースターに）閣下をも。　それから（皆皆に）あなた方をも。

妃　ケーツビー、すぐ行きます。……皆さん、一しよに參りますか？

リヴー　御一しよに參上します。

皆々入る。　グロースターだけ殘る。

グロー　（獨白）自分がした惡事を口實に、眞先に喧嘩をしかける。　窃と自分で持込んでおいて、責任は他人に脊負はせる。　クラレンスは、實は予が昏闇へ

投り込んだのだが、馬鹿者共には泣いて見せる。例へば、ヘスチングスやスタンリーやバッキンガムには。さうしてクラレンスを讒言するのは妃の一黨だといふ。奴等も今ぢやァそれを信じて、リヴァースやヲーガンやグレーに復讐をしろと予に勸める。けれども予は故と歎息して、ちよつぴり經典を持出して、神は怨みに報ゆるに善を以てせよと命ぜられると、斯う言ふ風に、聖書から盗んで來た夷ぎれで以て、素裸の惡黨根性に衣服を被せて、聖人顔をしてゐるんだ。が、實は、それが一等惡魔でゐる時だ。……

刺客役の者甲乙二人出る。

が、待てよ！　死刑係りが來た。……（二人を迎へて）や、どうした、大膽な、たくましい奴ら！　これからやッつけに行くか？

甲刺客　さやうでございます。御牢内へ入られますやうに御令狀をいたゞきたいと存じまして。

グロー　よう思ひついたなう。豫て準備しておいた。

と令狀を渡しつゝ

仕事が濟んだら、クロスビー・プレースへ來い。手ッ取早くやッちまへ、分疏なんかを聽いてゐちやいかんぞ。思ひ切つて殘忍にやれ。公爵は中々能辯だから、聽きかけたら、おそらく氣の毒になつて、手が出せなくなるだらうから。

甲　（鼻であしらつて）大丈夫でごわす、

喋舌せなんかいたしません。　多辯は善く行ふ所以にあらずでごわす。

手前共の職務は手でごわす、舌ぢやごわせん。

グロー　ぢや、汝らは磨石でも落すか、阿呆共が涙を落す時分に！　うい奴だ。　すぐに仕事にかゝれ。　さ、さ、早く。

甲　承知しました。

甲乙入る。　グロースターも入る。

第四場　ロンドン城内の獄室

クラレンス公爵と牢守の役人と出る。

牢守　閣下、どうして今日はそんなにお欝ぎでございますす？

クラレ　おゝ、昨夜は、實に情けない一夜を過した、厭な物ばかり出て來る、氣味のわるい夢を見た。　基督信者である以上、わしは又とあんな夜を過したくない、幾萬日の樂みに換へても。　あゝ、いやな、物すごい晩であつた！

牢守　どんなお夢でした？　承はりたうございます。

クラレ　何でも此ロンドン城から脱出して、バーガンディーへ渡らうとして、船へ乘込んだやうに思つた、弟のグロースターが同伴で。　彼れは、わしを船房から引張り出して、甲板を歩かせながら、英吉利の方を見させて、ヨオクとランカスターの王位爭ひの間に、吾々の身に降りかゝつた種々な災厄の話などをした。　さうして目くるめくやうな甲板の上を歩いてゐると、不意にグロースターが轉んだやうだつたので、わしがそれを止めようとした。　と、轉ぶ拍子に、彼れがわしを撲つた、其機勢で、わしは逆卷く怒濤の中へ抛り込まれた。　さア大變！　と思つたが、苦しいばかりで、中々死ねない！　耳の傍では、怖しい凄じい浪の音がする！　目には厭アな死の姿が見え

る！　何だか無數の怖ろしい死骸なんかゞ見えるやうに思つた。魚に肉や臓腑を食はれた數萬の人間や金塊や大錨や眞珠や價の知れない寶石や寶玉やが山のやうになつてゐて、さうしてそれが、海の底に散らばつてゐるやうに思つた。頭蓋骨の中に挾まつてるのもあれば、以前は目が棲んでゐた穴へ、寶石が其目を馬鹿にしたやうに、辷り込んで、きら〳〵と光つてゐるのもあつた、まるで、秋波を使つて、ぬら〳〵した海底に散らばつてる骸骨共を嘲弄つてゞもゐるやうに。

牢　御臨終に、そんな祕密なんかを御覽なさるお暇がございましたか？

クラレ　あつたと思つた。で、何度も死にさうになつた。けれども意地わるの浪めがわしの靈魂を抑へてゐて、浪の上へは出しをらんので、息が塞つて、胸が苦しくッて、わしは喘いで、はッ〳〵といつて、ついそれを吐出さうとした。

それでお目が覺めましたか？

クラレ　いや〳〵。夢は死んだ後までもつゞいた。おゝ、それから靈魂の苦惱が始まつた。わしは、靈魂が、例の詩に書いてある冥土川の渡し守に案内されて、あの陰氣な河を越して、常闇の王國へ渡つたと思つた。と、眞先にそこで逢つたのが、わしの舅の、あの英傑のウォーリックどので、わしを見るや否や、「不信不義のクラレンスめに此闇の國は如何なる懲罰を下し得るぞ！」と大聲で叫かれたと思つたら、消えた。すると、頭髪を血だらけにした天童のやうな美少年の幻がふら〳〵と出て來て「クラレンスが來をつた。不信不義の輕薄者のクラレンスめが來をつた。わしをチュークスベリーで刺殺しをつた奴ぢや。復讐神さま、あいつを捉へて苛責んで下さい！」と大きな聲で叫んだと思ふと、穢はしい鬼どもがわしの周邊へ群つて來て、耳の傍で怖ろしい聲をして、わい〳〵わい〳〵、吠えるやら、怒鳴

るやら、其怖さと騒ぎとで目を覺した。けれども慓えは止らない。で、わしは暫くは、地獄へ落ちたとばかり思つてゐた、それほどに怖ろしい夢であつた。

牢　お魘れ遊ばしたも不思議ぢやございません。お話を承つてさへも、すでいやうに存じます。

クラレ　おゝ、牢守、牢守、わしがさういふ靈魂の罪になるやうなことをしたのは、みんな王エドワードの爲にしたのだ。それだのに、王の其報酬振を見てくれ！　おゝ神よ、此年來の祈願も手前の罪惡に對するお怒りを和げるに及ばないで、お罰を下されまするにもせよ、どうか手前のみを御嚴罰あつて、何科もない妻や子供らをばお赦し下さいまし！……牢守、どうか暫くこゝにゐてくれ。氣が重くてならんから、少し眠りたい。

牢　承知いたしました。神さま、どうぞ御安眠をお與げ下さいますやう！

クラレンス眠る。

牢　（獨白）悲みは機を誤らせたり、安眠を失はせたり、夜を朝にしたり、晝を夜にしたりする。王候の榮譽も、要するに外面だけのものだ、內心には苦勞が絶えないのだ。想像で取越苦勞をして、始終不安を感じてゐるのだ。だから、身分の高下の相違は、つまり名稱だけのものだ。

甲乙の刺客役出る。

甲　おい！　だれだ、そこにゐるのは？

牢　さういふお前さんはだれだ？　どうしてこゝへ來なすつたんだね？

甲　クラレンスどのに用があつて來たんだ、歩いて。

牢　何て粗略な挨拶だらう！

乙　ぐづ〳〵と空世辭をいつてるよりア優しだ。（甲に）令狀を見せてやんな、もう彼是言ふにや及ばん。

牢守令狀を受取りて讀む。

牢　こりやクラレンス公をば足下達へ引渡せといふ御命令狀だ。此意味は考へないことにしよう、知つてさせたとなると心持がわるいから。……さ、これが鍵だ。公爵はあそこに眠てをられる。わしは、これから王のお許へ參つて、足下達へ責任を引渡したことを申し上げることにしよう。

甲　さうしなさい、それが怜悧な爲方だ。……さよなら。

牢守入る。

乙　え、眠てるとこをやッつけるかね？

甲　うんにや。欺し討にすると、起きた時に、卑怯だなんぞといふかも知れない。

乙　起きた時に？　馬鹿いへ、審判日が來るまでア起きる氣遣はない。

甲　さア、その審判日に、眠てる處をば彼奴らにやられましたといふだらうぜ。

乙　審判日といふ語に然う念を入れられると、氣が咎めらア。

甲　おや！　怖くなつたか？

乙　殺すのは怖かアない、令狀があるから。が、殺したゝめに地獄へ落ちるのはなア、それを豫防する令狀なんかはないんだから。

甲　汝ア肚が据つてるんだと思つてゐたのに。

乙　おれア生かしときたいといふ肚だ。

甲　ぢや、戻つてつて、グロースターさんに然ういへ。

と外方へ向く。

乙　ま、ちよと待つてくれ。佛氣がなくなるかも知れんから。ほんの些少の間、かういふ氣になるのが俺の定例なんだから。

甲　（一寸間をおいて）どうだ、どんな氣持だ？

乙　うん、まだ二滴ばかり良心めがこびりついてゐるやうだ。

甲　うまくやれア褒美だぜ。

乙　あ、さうだ。殺ッちまはう。それを忘れてゐた。

甲　おい〳〵、良心は何處へやつた？

乙　（眞であしらつて）グロースターさんの財布の中へよ。

甲　ぢや、褒美をくれるッて、財布を開けると、そこから汝の良心が飛出さうてんだな？

乙　かまふことアない。今時あんな物ア入用はないんだ。

甲　だつて、戻つて來たら如何する？

乙　うッちやつとくれ。ありや危險もんだ。人間を臆病にしッちまふからなア。盜まうとすると、怖い顔をする、惡口しようとすると、叱りやアがる。隣の嬶とそッと寢ようとすると、すぐに見附かる。おッそろしい羞恥屋で、胸ン中で反抗ばかり起してゐやがる。彼奴がゐると故障だらけだ。いつ

かも折角拾つた金財布を返させてしまやアがつた。彼奴に取附かれたが最期、一生乞食だ。どこの町でも、都でも、あいつア危險物だてんで、追拂はれることになつてら。うまく世を渡らうて者は、みんな、あいつの手を切ッちまつて、自己を主にすることにしてらア。

甲　畜生！　ちようど今おれの肱のとこへやッて來やがつて、殺すなッて、諫爭を始めやがつた。

乙　惡魔の同類になつた氣で、あいつの言ふことなんか聽かんこッた。あいつア、いつの間にか、つい潛り込んで來て、歎息ばかりさせやアがる。

甲　ヘッ、おれア土性骨がちがふんだから、びくともするこッちやアない。

乙　さすがに名代の惡黨らしい言分だ。さ、やらかすかな。

甲　劍の欄で、頭蓋をやッつけといて、次の室のあの葡萄酒の樽ン中へ突込んぢまはう。

乙　そいつア好い工夫だ！　浮かし煎餅の格だ。

甲　（クラレンスを見て）や！　動くぜ。……やらかすか？

乙　いゝや、一應口をきいてから。

クラレ　（目を覺して）牢守、おい、どこにゐるね！　葡萄酒を一杯くれ。

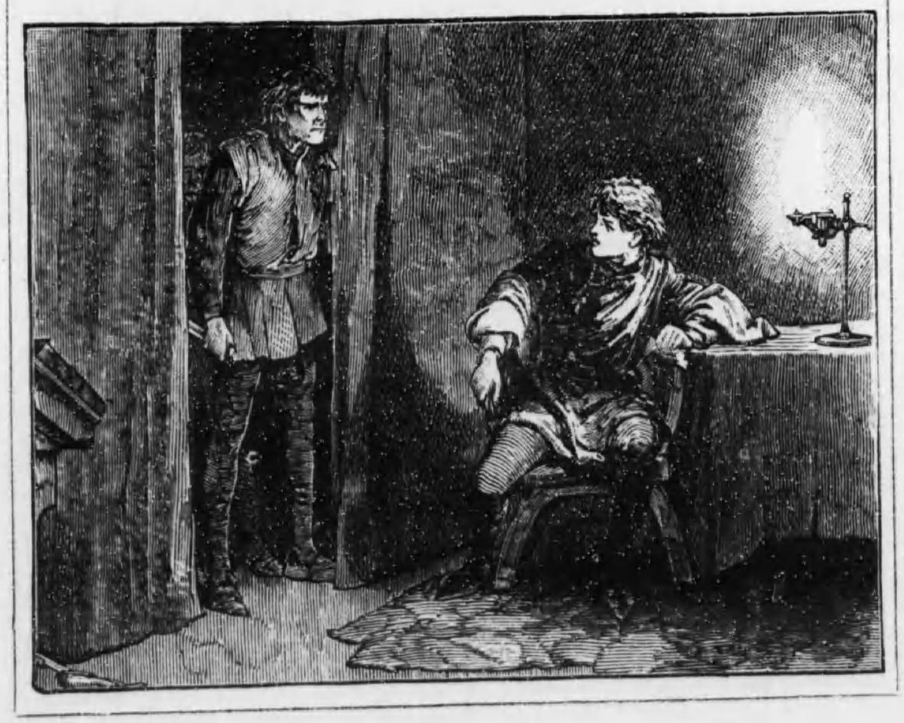
乙　御前、今にたんまり飲めますよ。

クラレ　や、だれだ、お前は？

乙　あんたも同樣の人間だ。

クラレ　でも王統ぢやアあるまい？

乙　王統でない代りに、あんたのやうな横道者でもない。



クラレ　聲は大きくて立派だけれども、人相は賤しい。

乙　其筈だ、聲は王さまの代理だけれど、面は持前のまゝだからね。

クラレ　不氣味なことばかり言ふ！　お前がたの其目附が不氣味だ。なぜそんな蒼い顏をしてゐるのだ？　だれの吩附で來たんだ？　何しに來たんだ？

二人　あんたを、えゝ、あんたを……

クラレ　殺しに來たのか？

二人　はい、さやうです。

クラレ　明言し得ないとこを見ると、實行する勇氣はないのだらう。ねえ、これ、お前たちに予が怨まれる筈はないぢやないか？

甲　わしらにアありませんがね、王さまにアあります。

クラレ　王とは、わしは今に、仲直りをする積りだ。

乙　そりや駄目でさ。だから死ぬ準備をなさい。

クラレ　仕事もあらうに、お前たちは、無罪の者を殺す役に選び出されたのか？　予に何の罪がある？　罪科のどういふ證據がある？　嚴格な判官どもに有罪の宣告を下させるやうな正式の審判廷はまだ一度も開かれたことがないぢやないか？　此不幸なクラレンスをだれが死刑に言ひ渡したのだ？　法律上、有罪とも定つてゐないのに、殺さうとするのは、無法千萬だかりにも、我々に代つて血をお流しになつたイエスのお救ひを受ける氣なら、すぐ歸つて行け。予に手を觸れるな。おれを殺さうとするのは墮地獄の大罪だぞ。

甲　わしらはお命令ですんでさ。

乙　しかも王さまのお命令でさ。

クラレ　それが大きな心得ちがひだ。王の王たるお方が、其御大法の箇條中に、汝人を殺す勿れ、とお掟遊ばされた。汝は天帝のお掟を蔑ろにして、人間の命令を守らうといふのか？　警戒しな、お掟に背く輩の頭上へは、必ず御懲罰をお下しになるから。

乙　その御懲罰を神さまがお前さんに下すんだ、二心を抱いたり、人殺しをしたりしたから。お前さんは、ランカスター家の爲に必ず戰ふといふ聖禮を受けておいて……

甲　さうして其誓言を破んなすつた。取りも直さず、神さまの謀反人だ。おまけに、其二心の劍で以て、御主君だつたヘンリー王さんの息子の腹を立割りなすつた……

乙　庇ふのが當然の、其王子さんの土手ッ腹を。

甲　おれたちに天罰が下るもないもんだ、お前さんは自分が怖ろしい惡いこと

をしてるんだ！

クラレ　（歎息して）あゝ、情けない！　だれの爲に、そのわるいことをしたんだ？　みんなエドワードの爲にしたのだ、兄貴の爲にしたのだ。　これ、お前たち、……王が、その爲にわしを殺させる筈はない。　それを言やァ王も同罪なんだから。　萬一、神が其事でお罰しなら、おゝ、無論、公然とそれをなさるべきだ。　かりにも天帝に代つて處分をしようなんぞと思ふな。　神は、法に背いた間接な手段なんぞをお用ひなさる筈はない、罰をお下しになる場合に。

甲　ぢや、どういふ仔細で、あのブランタジェネット家の、若木の、あの花のやうな初陣の王子さんを酷たらしく殺したんだね？

クラレ　兄を思ふ心と心の鬼と腹立紛れとがさせたことだ。

甲　おれたちがお前さんを殺さうとするのも、其お兄さんを思ふ心と義務の念

とお前さんの罪惡とがさせるんだ。

クラレ　おゝ、兄を思ふといふのが眞實なら、おれをも憎んでくれるな。　おれは王の實の弟だ、さうして王を愛してゐる。　褒美の金を宛に雇はれたのなら、歸つてつてくれ。　弟のグロースターの許へ紹介してやるから、彼れはきッとお前たちに褒美をくれる、おれを助けたといやァ喜んで、……王がおれの死んだのを喜ぶどころぢやない。

乙　大まちがひだ！　弟さんのグロースターさんは、貴下を憎んでゐる。

クラレ　いや〳〵、そんな筈はない。　彼れはわしを大事にしてゐる。　彼れの許へ使ひに往つてくれ。

二人　はい〳〵、承知しました。

クラレ　さう言つてくれ、父ヨオク公が、例の大勝利を得られた際に、吾々兄弟三人を祝福せられて、さうして、「三人とも衷心から相愛して末長く力に成り合

へ」と言はれた時の事を思へッて、彼時にア、兄弟の仲が如是風にならうとは、夢にも思つてゐなかつたらうッて。　グロースターは、それを憶ひ出すと、泣くだらう。

甲　さやう、磨石でも零すでせうよ。　あの人はさういふ泣き方を敎へてくれましたッけ。

クラレ　おゝ、そんな惡口をいふな。　彼れは情の深い男だ。

甲　いかさま、水溜りの深さぐらゐにはね。……お前さんの考へは大間ちがひだ。　殺させにおれたちをよこしたのはあの人でさ。

クラレ　そんなことがあらう筈はない。　此間別れた時に、彼れはわしを抱きしめて、獻欷をしながら、今に何とかしてわしを救ひ出すと誓つたくらゐだ。

乙　其通り。　だから此世から救ひ出して、天堂の極樂へ送らうといふのでさ。

甲　どうしても命アないのだ。　だから神さまへお詫をなさいよ。

クラレ　神さまへお詫をしろと忠言するほどの佛心がありながら、どうして神罰をも恐れず、おれを殺さうとするのだ？　後では、おのしらに此惡行をさせた當人とても、おのしらを憎むに相違ないぞ。　それを思へ。

乙　（躊躇して獨語のやうに）どうしたらよからうう？

クラレ　やさしい心持に立歸つて、地獄へ墮ちるのをまぬかれろ。

甲　やさしい心になれ！　そりや女や臆病者のすることッた。

クラレ　いゝや、さうせんけりや、獸だ、野蠻だ、惡魔だ。　おのしらだつて、若しおのしが王族であつて、おれのやうに牢へ入れられてゐて、そこへ二人の刺客がやつて來たとしたら、助けてくれと言はないでをられるか？　え？……（乙に）なア、お前は、幾らか情けがありさうな顏をしてゐる。　其目附が虛言者でなけりや、わしの身方になつて、わしの爲に命令してくれ、お前が自身こんな目に逢つたらと思ひやつて。　王族たる者が「どうぞやお慈

悲！」をいふのだ、世界中の乞食が同情してくれさうなものだ！

乙　一寸、背後を御覽なさい。

此うちに甲背後から刺す。

甲　さ、どうだ？　どうだ！　これでまだ利かなけりや、彼方に在る葡萄酒の樽へ抛り込んでくれよう。

甲はクラレンスの死骸をひッかたげて入る。

乙　慘い仕事だ。やけにやッつけたもんだ！　ピラトぢやないが、おれア此むごたらしい人殺しの罪からは手を洗つてゐたいわい！

甲又出る。

甲　どうしたんだ！　手傳つてくれないのは、どういふ料簡だ？　公爵さんにきッと知れるぞ、汝の怠けたことが！

乙　兄御をおれが助けようとしたことを知らせたい位ゐのもんだ！　褒美は

汝貰へ、さうして俺の言つたことを言ッつけろ。俺ア公爵さんを殺さなけりやよかつたと思ふ。

乙しほ〳〵として入る。

甲　おれア然う思はん。臆病者め、往け！……そこで死骸をどこかの穴へ隱しとかんけりやならん。公爵さんが葬る指圖をさつしやるまで。それから、褒美を貰ひ次第に高飛だ。露顯するに違ひないから、こゝにアゐられない。

入る。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

第二幕

第一場　ロンドン　王宮

喇叭を盛に吹く。病王エドワード四世介抱せられて出る。つづいて妃エリザベス、其の子ドオセット侯、妃の弟リヴース卿、ヘスチングス卿、パッキンガム公、妃の子グレー卿及び其他出る。別室で、此等諸人の間の仲直りに關して、既に一應王の說諭が濟んだ體である。

王　さ、それでよろしい。わしもこれで、好い一日の務めを果した。諸卿よ、

どうか此和親を、末長くつゞけて下さい。毎日贖罪のお使ひの來るのを待つてゐる此身ぢやが、かうしてお前たちを此世で仲直りをさせた以上、わしは初めて安心してあの世へ往くことが出來る。リヴースよ、ヘスチングスよ、手を取り合つてくれ。意趣遺恨を腹藏するやうなことをしないで、これからは愛しあはうと誓言してくれ。

リヴース　誓つて、此心から意趣遺恨を洗滌します、さうして（とヘスチングスの手を握つて）此手で此心の誠に封印を與へます。

ヘスチ　何卒好運を賜はりますやう、手前も同樣の誓言をいたします！

王　決して主をもてあそび奉るやうなことをしてはならんぞ。假にも詐り奉るに於ては、宇宙の主たる大君が、其詐りの懲罰として、汝たちをして相滅さしめるやうになさるに相違ないから。

ヘスチ　何卒榮えしめ賜はりますやう、手前は飽迄も二心のないことを誓ひます

る。

リヴー　わたくしとても、向後は、衷心から、ヘスチングスを愛しまする。

王　妃、あんたとても同様ぢや。又、ドオセットも、バッキンガムも、又、(グレーに)お前とても。もう將來は、お互ひに、決して徒黨をこしらへるやうなことをしてはなりませんぞ。(妃に)なう、將來はヘスチングスと仲を好くなさい。其手にキッスをおさせなさい。何事も、これからは、表裏のないやうに。

妃　さァ、ヘスチングスどの、今までの事は、何もかも、清淨に水に流しませう。何卒此身をはじめ、うから、やからに、好運を下し賜はりますやう！

王　ドオセット、彼仁を(とヘスチングス(思人))お抱き。……ヘスチングス、彼れを(とドオセット(思人))愛してやつて下さい。

ドオセ　仲直りの誓約をいたしました以上、手前に於ては、決して犯し破るやうな

ことはいたしません。

ヘスチ　手前とても同様に誓言いたします。

二人抱擁して二心なきを誓ふ。

王　さ、此上は、バッキンガムどの、足下が妻の同志の者と抱合つてくれられさへすれば、此和睦の奥印が濟むといふものぢや。さうなると、わしも始めて安心する。

バッキ　(嚴かに)若し此バッキンガムが、あなたゝちに對し、忠愛の誠を盡さず、假にも惡意を抱くやうでしたら、神は必ず、最も愛さるべき場合に最も憎まるることによつて、手前をお罰しなさるでありませう。手前の最も深く信頼せんとする腹心の友が極めて腹黑き反覆常なき僞り者と相成りますやう、萬一にも手前があなたゝちに對して不信な振舞をいたしたなら！　かやうに、豫め神に御處分を祈りおきます。

みな〳〵抱き合ふ。

王　（喜びしげに）バッキンガムどの、足下の其誓言は、わしの此病んだ心に取つての此上もない強壯劑ぢや。こゝへ弟のグロースターが加はつてさへくれれば、和睦が圓滿に整ふのぢやが。

バッキ　あ、ちようど、公爵がお見えになりました。

グロースター出る。

グロー　兩陛下の御安泰を祝しまする！……諸卿がたにも、御機嫌よう！

王　（グロースターに）實にけふはめでたい日であつた。なう、弟、實際、けふは善根を積んだわい。互ひに怒つたり怨んだりしてゐた此手合を、從來の意趣を悉く捨てゝ、仲直りをさせた。

グロー　どうもそれは、結構なお仕事でございました。……（と言ひつゝ衆人を見返つて）若し此列座中に、誤解もしくは誣罔によつて、自分を敵視してをらるゝ仁

があるなら、萬一にも自分が、心附かずに又は何かの腹立紛れに、どなたかに、曾て不埒をしたやうなことがあるならば、どうか御寛恕を願ひたい。同胞を憎んだり敵にしたりするのは自分には死の苦みである。最も堪へられないことである。わたしは衆人に可愛がられたいのです。……（と妃の前へ進みて）先づ、お妃、以後は力めて忠勤を盡します、どうか眞實の和睦をお許し下さい。從兄弟のバッキンガムどの、あんたもねえ、若し從來お互ひの間に、何等かの蟠りがあつたとすれば。……リヴース卿、あんたもねえ。……ねえ、貴下も、グレー卿。其他、故なくわたしを、敵のやうに思つてゐなすつた諸君にもです。公爵、伯爵、卿、士、だれに對してだつて、わたしは惡意なんか有つちやゐない。昨夜生れた赤兒同樣に無邪氣なのです、あらゆる英國人に對して。わたしの此謙遜な心は、全く神の賜だと感謝してゐるのです。

妃　けふの此日を將來までも神聖な記念日として、一切の行違ひを圓滿に收治めてしまひたいと存じます。……ついては、陛下に請願いたします、どうかクラレンスどのを、御宥免になりますやうに。

グロー　あゝ一寸、お妃、王の御前で、さういふ嘲弄めいたお言葉を承はらうとて、わたしは此和睦を申し出しはしませんぞ！　兄の公爵が死刑になつたことは、どなたも、夙に御存じでせうに！　そんな虚々しいことをおつしやるのは死骸に對する侮辱です。

とわざと憤慨する。皆々駭いて色を失ふ。

王　とうに存じてゐる筈だ！　どうしてり？

妃　何もかも御存じの神さま、ま、何といふ世の中！

バッキ　ドオセット卿、わたしの顔の色も皆さんのやうですか？

ドオセ　えゝ、眞蒼です。　みんなの顔が然うです。

王　クラレンスが死刑になつたり？　そりや予の命令とは反對だ。

グロー　いゝえ、陛下の最初の御命令によつて刑せられたのです。　あの御命令は、翼の有る使神のやうに、忽ち達きましたが、後の取消しのお使ひの方は、まるで跛足のやうに緩くッて、死骸を埋めた時分に、やつと着いたんです。　あゝ、みじめなクラレンスよりもずッと卑劣で、不忠で、又彼れよりも王統の血は淡いが、横道の智慧は濃いといふ不埒者が、隨分神にも睨まれないで、公々然に世を渡つてゐるのに！

スタンリー　伯出る。つか〳〵と王の前へ進んで

スタン　（跪いて）日頃の忠勤に對し、御恩賞を戴きたうございます！

王　頼む、止してくれ。　わしの胸は今は悲みで塞つてゐる。

スタン　お許容下さいません限りは、起ち上りません。

王　ぢや、何が貰ひたいのぢや、それを言へ。

スタン　陛下、手前の家來の亡い命を戴きたうございます。彼れめは、本日、ノオフォルク公が近頃抱へました或亂暴な侍士を殺害いたしましたのです。

王　（歎息して）王族の弟に死刑を宣告しておきながら、其同じ舌で下司の殺人罪を宥すといふことが當然な處分であらうか？　弟は何者をも殺しはしない。彼れの罪はほんの思想たるに過ぎなかつた、けれども慘たらしく死刑に處せられた。だれが彼れの爲に命乞ひをしたか？　予が怒つてゐた時に、だれが前へ來て跪いて、考へ直してくれろと言つたか？　骨肉ぢやないかと誰れが言つた？　友愛の必要を誰れが說いた？　弟が、あの大ウォーリックに背いてまで、予の爲に戰つてくれた其功績を、だれが予に注意してくれたか？　チュークスベリー附近の戰場で、おれがオクスフォードの爲に、既に一命を失はうとした時、彼れが救うてくれて、「兄さん、生存へて、王にお成りなさい、」と勵ましてくれたことを、だれが予に憶ひ出させてくれたか？　だれが予に知らせてくれた、予が戰場で殆ど凍え死をしさうになつた時に、彼れが自分の上被を脫いで、予を包んでくれたことを、自分は裸同樣の薄被のまゝで、あの身の麻痺れる寒い晩に？　それもこれも、一旦の怒の爲に、予が忘れてしまつてゐた時、だれ一人深切に憶ひ出させてくれる者もなかつた。それだのに、たかゞ馬丁、從僕が、醉つた揚句に、人殺しをしたからって、救世主の御面影を毀つたからって、直に跪いて、御赦免々々と歎願する。さうして予もまた、片手落だと思ひながら、それを許さんけりやならん。けれども予の弟の爲には、だれ一人口を利く者もない。さうして非道にも、予自身も、何にも言はない。お前がたの中の最も威張つてゐる者でも、彼れには恩を受けてゐる。けれども一人として彼れの命乞ひをしようとはしない。おゝ神よ、此罰が予にも、お前にも、予の身内にも、お前らの身内にも、みんなの身の上へ降りさうだ！……おい、へ

スチングス、予を寢間へ伴れていつてくれ。……あゝ、憫然なクラレンス！
悲み悶へながら、ヘスチングスに介抱せられて王が入る。と
妃はじめ多くの者が從いて入る。

グロー　（王を見送つて）輕忽をなさるからだ！……（バッキンガムに）ねえ、妃の親戚連は、クラレンスが死んだと聞いて、顏の色を變へた、胸に覺えがあるからです。殺させようとして、始終王を突ついてゐたのです！　今に天罰が降るだらう……が、まゝ奥へ往つて、傍にゐて、王を慰めよう。

バッキ　お伴いたしませう。

二人とも入る。

第二場　宮殿

エドワード四世の實母、ヨオクの老公爵夫人、手を振絞り、頭を振り、悲歎の體にて、クラレンスの男女の二兒と共に出る。

童　（おろ〳〵して）ねえ、お祖母さま、お父さまは死んぢまつたの？

老夫人　（泣く〳〵）いゝえ。

童　ぢや、なぜそんなに手を振つたり胸を叩いたりして「おゝクラレンス！不幸なわたしの子！」なんぞとおつしやるの？

女兒　なぜわたしたちの顏を見ては、お頭を振つて、「あゝ慘な子だ、孤兒になつて、捨てられッ子になつて」なんておつしやるの、お父さまが死なゝいなら？

童と女兒とは老人に取縋りてせがむ。

老夫人　（尙泣く〳〵）可愛い孫たちや、そりや大きな間違です。わたしは王の御病氣を歎いてゐるのです、お亡くなりなさりはしないかと。お父さんの事ではない。死んだ人を幾ら歎いたつても、爲樣がありません。

童　ぢや、お祖母さま、お父さまは彌〻死んぢまつたのね。お父さんを殺したのは伯父さんの王さまだわねえ。（泣きながら）神さまは、きッと讐を復つて下さるだらう。わたし、以後、毎日々々、神さまにお祈りして、讐を復つて貰ふわ。

女兒　わたしも然うするわ。

と泣く。

老夫人　（二人を制して）これさ、まア、お默り！　王はお前がたを可愛がつてお在なさるのに。何にも解りもしない癖に、だれがお父さんを殺したかを知りもしない癖に。

童　いゝえ、知つてます、お祖母さま。叔父さんのグロースターさんがをしへてくれましたの。王は、お妃がお勸めしたんで、お父さまを罪におとして牢屋へお容れなすつたんだつて。叔父さんは、其お話をした時に、泣いて、

わたしを抱きしめて、頰にキッスをして、「おれをお父さんだとお思ひ、子のやうに思つて可愛がるから」ッて言ひました。

老夫人　おゝ、譎詐めがそんな優しらしい姿を盗んで、假面で奸謀を隱しをるとは！　彼れが我子かと思ふと、恥かしい。此乳房からは、決してあんな邪曲根性を注込んだ覺えはないのに！

童　ぢや、叔父さんは虛言者なの？

老　あゝ、うそつきなのよ。

此時奥にて物音、人聲がする。

童　さうは思へないわ。……あら、何だらう？

妃エリザベス、髪を振亂し、狂ふやうにして出る。リヴース卿、ドオセット卿つゞく。

妃　おゝ、だれが何といつたつて、これが泣かないでをられるものか？　運命

を呪はないで、此身を苛責しないでをられるものか？　靈魂が如何ならうとも介意ふものか、我れから怖ろしい絶望と一しよになつて、自分で自分を敵にしてしまふんです！

老妃　ま、どうしたといふのです、そんな亂暴な、無法な愁歎をなさるのは？

（泣きながら）わたしの悲劇の大詰が來たのです。我夫のエドワード王が、あなたのお子のエドワード王が亡くなつてしまはれました！　根が枯れてしまつたのに、どうして枝だけが榮えてゐるのです？　液が乾いてしまつたのに、どうして葉が凋まないでゐるんです？　生きてるのなら、お泣きなさい。死ぬのなら、早くお死に。今すぐなら、翼のある靈魂が王のお後を慕つて追附き得るだらう、忠義な家來らしく、王の冥土の御領地までもお供するだらう！

老　（泣く〳〵）あゝ、其歎きにはわたしも十分に關係があります、あんたの夫はわたしの實の子でござるもの！　立派な夫に死別れてからは、形見の子供らを力草に、生きてゐたのに、其二個の形見の鏡さへも、非業に碎けてしまうたのか！　只た一つ殘つたあの鏡めは、慰めになるどころか、此身の恥になるばかりぢや。……（妃に）あんたは既う寡婦ぢや、けれども子供たちが殘つてゐるから、まだしも母としての慰めがある。わたしは死神めに抱いてゐた夫を奪はれた上に、此痩せた腕から、二本の撞木杖をも奪られてしまうた、エドワードをも、クラレンスをも。　おゝ、あんたの歎きは、ほんのわたしの一部分ぢや、あんたの十倍も二十倍もわたしは泣きわめいてもよいわけぢや！

童　（妃に）伯母さま、貴女はなア、わたしらの父さまの死んだのを、些も歎いて下さりませなんださうな。　だから、お氣の毒だといつて、一しよにお泣きするわけにいかないでせう？

女兒　わたしたちがお父様を亡くして泣いてゐても、可哀さうだとも言つて下さらなかつたんだわ。寡婦さんにお成りになつても、わたしたち何とも思はないわ。

妃　(二人に)泣くのを手傳つておくれとはいひません、わたしは幾らでも一人で泣きます。世界中の泉源よ、わたしの目へ有りッたけの流れを注ぎ込んでくれ、此目を海にして、月の支配を受けて、世界中を溺らせててまふほどの洪水を送り出して見せるから！　お、戀しい夫のために、エドワードどのゝために！

子供ら　お、、戀しい〳〵お父さまのために、クラレンスさまのために！

老　お、、悲しや〳〵！　二人ながらのために！　エドワードのために！　クラレンスのために！

妃　エドワードどのゝ外に頼りに思ふ人はなかつたのに！　お果てなされてしまつた！

子供ら　お父さまの外に頼りに思ふ人はなかつたのに！　お死になされてしまつた！

老　あの二人の外に頼りに思ふ者はなかつたのに！　亡くなつてしまうた！

妃　こんな不幸に逢つた寡婦があらうか！

子供ら　こんな不幸に逢つた孤兒があらうか！

老　こんな不幸に逢うた母親があらうか！　悲しや〳〵！　此一切の悲みはみんな〳〵わしの有ぢや！　彼等の歎きは割當なのぢやが、わしは其總元締ぢや。彼女はエドワードの爲に泣く、わしも彼れの爲に泣く。子供らはクラレンスの爲に泣く、わしも彼れの爲に泣く。わしはクラレンスの爲に泣く、彼女は其爲には泣かぬ。わしはエドワードの爲にも泣く、彼等は其爲には泣かぬ。お前たちは、寄つて集つて、此三重に泣いてゐるわし

の身へ、涙をば振掛けさつしやる！　あゝ、悲しや〳〵！　わしはお前たちの愁歎の保母も同樣、泣いて〳〵、それをば大きうするばかりぢや。

ドオセ　（妃に）お母さま、まア〳〵、そんなにお歎きになると、神さまが非常に御不快に思しめすでせう。　大慈悲の御心を以て、お貨與になつてをりましたものを、お取戻しになつたからつて、お怨み遊ばすのは、俗事に喩へますと、恩を知らない勝手な所行に當りますから、天に對しては尙更のことです。

リヴー　王の御壽命は、暫時、天からお借受けになつてゐたに過ぎないのですから。お妃、世間の行屆いた母親のやうに、專らお少さい王子のお身の上をお考へなさいまし。　すぐにも王子をお呼び迎へになつて、お卽位の御準備をなさい。　これからは王子がお力です。　無謀の御愁歎は故王の御墓所へお埋めなすつて、未來のお喜びの苗を、新エドワード王のお椅子の上へお植附けなさい。

此中グロースター、バッキンガム、スタンリー、ヘスチングス、ラトクリップ（士爵）出る。

グロー　お妃、ま、そんなに、お歎きなさるな。　明星の地に墮ちたのを歎き悲しむのは、わたしども一同、いづれも御同樣なのだが、今更どう歎いて見たとて、だれも、どうも、致しかたがない。……（老夫人に）おゝ、お母さま、御免下さい。　貴女がそこにいらつしやるのが見えなかつた。（と恭しく老夫人の前に跪いて）謹んでお惠みを乞ひ奉ります。

老　（定式通りに）神よ、お惠みを垂れさせられまして、此兒の心をば溫和ならしめたまへ！　愛を、慈悲を、柔順を、眞の道を守りますやう！

グロー　（口のうちで）アーメン！　さうしてお心よしの好々爺になつて死果りますやう！　と來るのがお袋の祝福の結局だ。　どうして言ひ添へるのを忘れたか知らん！

バッキ　（リヴース、ドオセット其他一同に）諸君、此共同の大不幸の重荷の爲に、堪へがたい苦悶憂愁を感ぜられ一ますのは、御道理千萬ではあるが、お互ひの睦じいのをせめてもの慰めとして、お諦めなさい。故王の御全盛時は過去りましたものゝ、新王の御全盛はこれからです。貴下がたのお仲たがひの傷口は、幸ひに縫合せも濟んで、めでたく御療治が屆いたのですから、此上は只もうそッと大切になすつて、二度と破綻の生じないやうになさるべきです。で、自分の考へでは、此際、小人數で、速かに幼王子をラドローから此都へお迎へ申して、すぐさま御即位といふことに致したがよからうと存じます。

リヴー　小人數とおつしやるのは、バッキンガム卿、どういふわけです？

バッキ　と申すのは、多勢ですと、それが爲、やッと療治が屆いたばかりの傷が、どんなことで、又口を開くまいものでもないからです。それは、お嗣がまだ定らない、あやふやな際に於て、特に危險です。さういふ際には、どの馬も、とかく氣が立つてゐて、おのが好いた方へ駈け出さうとしますから。公然の危險は勿論、隱然たる危險もまた、同じく警戒を要しますから。

グロー　王の命で、わたしたち一同は既う和睦してしまつてゐるから、わたしは最早大丈夫だと思ふねえ。

リヴー　わたくしも然う思ふ。みんな然う思つてるでせう。けれども、何分昨今の事ですから、うつかり多勢で押出したら、或は意外の衝突を起しでもしさうなやうに言ひ觸らされないとも限らない。ですから、わたくしは小人數でお迎ひといふバッキンガム公のお説に贊成します。

ヘスチ　わたくしも御同樣です。

グロー　ぢや、さうなさい。そこで、だれが急使となつてラドローへ參るべきかは、彼方で定めませう。……お妃、又お母さまにも、此重大な相談の席へお臨み

下さいますか？

老夫人　勿論です。

バッキンガムとグロースターだけ殘りて皆々入る。

バッキ　閣下、だれがお迎へに參るにも致せ、閣下も小生も、是非後れないやうにしなけりやなりません。と申すのは、序に、先頃一應御相談申しておいた例の、妃の、あの高慢な親族たちを故王から引離す件に就いての手ほどきをしたいと存じますから。

グロー　わしの半身とも、顧問會とも、神託とも、豫言者とも思ふバッキンガム君、わしは全然小兒のやうに、ひとへに足下にお任せする。……ぢや、ラドローへ。後れちやならんから。

二人ともに入る。

第三場　ロンドン　街上

左右より市民甲乙出て行逢ふ。

甲　や、これは。どちらへ、大層お急ぎで？

乙　實は、半夢中です。噂をお聞きになりませんかい？

甲　はて、王がお亡くなりになつたさうで。

乙　とんだこッです。とかく好い

知らせてものはないもんです。どうも亂脈なことにならなけりやようごすがなア。

丙の市民出る。

丙　や、今日は！

甲　や、これは、御機嫌よう！

丙　王さまがお亡くなりになつたといふのは本當ですかね？

乙　はア、全くなんです。どうもはや！

丙　ちや、何ですな、亂脈なことになりませうぜ。

甲　いや〳〵、神さまが附いてお在ですから、王子がお治めになりませうよ。

丙　子供の王さまぢやア、其國は慘でさ！

乙　いゝや、大丈夫でせう。御幼少中は顧問たちが治められませうし、丁年におなりになりや、無論御自身でお治めになりませうから。

甲　あのヘンリー六世さまが、御生後たつた九ヶ月で、パリーで御卽位になつた時が、ちようどさういふ風でした。

丙　ちようど斯ういふ風でしたつてり？　何の〳〵、大ちがひでさ。何故なら、あの時にや、顧問官たちは、みんな有名な、立派な大政治家たちでした。

甲　あの時の御後見役は賢人揃ひの伯叔父さんがたでした。さういやア、今回だつて、父方、母方双方の多勢の伯叔父さんがおあんなさる。

丙　いつそ父御方ばかりだと可い。で無けりや、父御方は全然無けりや可いのだ。といふのは、何方が王位に近いかといふ競爭が激しいさうだから、わるくすると、此方らの身に近い災難になりかねない。あのグロースターさまが一等けんのんだ！　それから、お妃のお子さんがたやお兄弟衆は、あの通り高慢で威張り返つてゐさるんだからね。あの人たちが支配をし

ないで、支配される方へ廻りや、ま、どうか斯うか亂脈にもならないで濟むだらうけれどね。

甲　おい〳〵、そりやちッと案じ過しだらう。どうか好い具合になるだらうよ。

丙　雲が出ると、機敏な連中は雨衣を被る。葉が激しく散りや冬が來る。え、日が沈みや夜だらうぢやないか？　時ならん暴風雨は不作を豫想させる。どうにか好い鹽梅式になるでもあらう。

乙　以上、業報以上の目にも出逢ふ。

丙　全く衆皆、大惱々の體だ。只の一人だつて、話し合つて見ると、將來を心配して、怖ろしがつて居ない者はない。大改革の起る前は、いつでも然うだ。神の賜はつた本能て奴で、自然と近づいて來る危險を感附くんだね。ちようど大あらしの前に、海の水が沸立つやうなものだ。だが、ま、萬事、神さまにお任せ申しておくんだ。……

乙　どつちへ行きなさるんです？

丙　判事さんを呼びに行くんでさ。わたしもさうなのだ。ぢや、一しよに行きませう。

皆入る。

第四場　ロンドン王宮内

ヨオクの監督長、故エドワード王の第二子ヨオクの幼公爵、妃エリザベス及びヨオクの老公爵夫人出る。

監督長　昨夜はノオサンプトンのお泊りでありましたさうですから、今晩はストニー・ストラトフォードに御投宿の御豫定であらせられます。明日か明後日には、こゝへお着でございませう。

老夫人　わしは王子に逢ひたうて、逢ひたうてなりません。先頃逢うた時よりは、ずッと大きうなられたであらうと思うて。

妃　いゝえ、大きうはならんさうです。此兒の方が（とヨオク公へ科をして）大きい位ゐだとか聞きました。

ヨオク　はい、さう言ひました。けれどもわたしそれは厭です。

老夫人　なぜ厭ですの？　大きうなるのは好いことです。

ヨオク　お祖母さま、或晩にねえ、衆が一しよに夕食をしてますとね、リヴースの叔父さんが、わたしの方がお兄さまよりも大きくなつたと言ひました。すると、グロースターの叔父さんが「小さい草は懐しいが、大きい草はずんすん長る」と言ひました。それからは、わたし、あんまり早く大きくなりたくないと思ふやうになりました。綺麗な花は中々大きくならないけれど、いけない草は早く長るといふんですもの。

老夫人　ほんに〳〵、あんたにそれを言うたあの叔父さんには、其格言が當つてません。彼れは幼い時分には、それは〳〵慘な程弱い子で、生長つのに手間取つて、長いことかゝつた。だから、其格言が眞理なら、彼れが懐しい人柄でなけりやならん。

監督　あの御仁は全くお懐しい方であらせられます。

老　でもあらうかと思ひますが、氣に懸けるのは母親の常でございます。

ヨオク　（ふつと憶ひ出したらしく）あゝあの時、あの事を知つてゐれア、叔父さんをやッつけてやつたんだものを。わたしよりも叔父さんの大きくなつた話の方がをかしいんだもの。

老　え、ヨオクちやんや、どうして？　ねえ、其お話といふのを聽かしとくれな。

ヨオク　みんながね、あの叔父さんは大變に早く大きくなつたッて言ひましたの。生れて二時間で以て硬い〳〵皮や肉をお咬みになつたつて。わたしは齒

の生えるまでに、二年かゝりましたでせう？　お祖母さま、ね、こりや皮肉な洒落でせう。

老　ねえ、ヨオクちやんや、だれがそんな事を言ひましたの？

ヨオク　お祖母さま、あの人の乳母が。

老　彼れの乳母が！　だつて彼女は、あんたが生れんうちに死にましたよ。

ヨオク　で無かつたとすると、だれだつけかう？

妃　まア、すゝどい子！　これさ、いゝ加減になさいよ、ま、口のわるい！

監督　お妃さま、子供衆です、お叱り遊ば！　ますな。

妃　小さい水瓶にも大きな耳と……

と言ひかける。使者役の者出る。

監督　お使ひが参りました、……（使者に）何事ぢやな？

使　御前、申し上げかねまする悪いお知らせでございます。

妃　王子の御機嫌は？

使　恙なくお健勝でいらせられます。

老夫人　では、知らせは何ぢや？

使　リヴースさま、グレーさま、トマス・ヲーガンさま、いづれも囚人としてポンフレットの牢獄へお送られ遊ばしました。

皆々驚く。

老　令狀を下したのはだれぢやう？

使　グロースターさまとバッキンガムさまでございます。

妃　何の科で？

使　只今申し上げました以外の事は存じません。何故に、何の爲に、お三方が御禁獄とならせられましたか、一向に存じません。

妃　あゝ、こりや、もう我一家が亡びるのでもあらう！　仔羊の群へ虎が爪を

掛けたのだ。王座が幼稚くッて、威がないので、暴虐めが既う蔑ろに爲始めたのだ。もうかまはない、破滅も來い！　死も、虐殺も來をれ！　行末の一切が、繪圖で見るやうに、もう瞭然と見えてゐる！

と泣く。

老　あゝ、呪はしい、厭はしい、亂世の長い月日、わしは既う今までに、どの位然ういふ月日を見たか知れん！　夫は、王冠を得ようとして一命を落された。子供らはまた、幾たびもく、勝つたり負けたり、榮えたり衰へたりの其都度々々に、此身も共に、喜んだり悲しんだり、泣いたり笑つたり。やつと事が定まり、内亂も悉く鎭つて、我子らが勝利者となつたかと思ふと、お互ひ同志の戰騷ぎ！　血で血を洗ひ、おのれとおのれを攻め苛責む。おゝ、不倫非道の狂氣沙汰！　おのれ、よい加減に其亂暴を止めをるか、で無くば、おれをばけふ明日にも死なせてくれ！　もう〳〵慘い目は見たう

ないわい！

と泣く。

妃　（ヨガクに）さア〳〵、聖院へ往きませう。……お母さま、御機嫌よう。

老　わしも一しよに往きませう。

妃　貴女はいらつしやるに及びますまい。

監督　さ、お妃さま、さ、お出掛け遊ばせ。お寶物やお調度類をも御持參遊ばせ。お預りの玉璽は、只今お手許へお引渡し申します。何卒御照覽！　手前は飽迄も御一同のお爲を圖りまする。さ、聖院へ御案内いたしませう。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

皆々入る。

第三幕

第一場　ロンドン　街上

喇叭。　幼太子エドワード、公グロースター、公バッキンガム、カンタベリーの大僧正ブールチャー、士爵ケーツビー及び其他多勢出る。

バッキ　ようこそ御王城ロンドンへ

御還啓遊ばされました。

グロー　ようこそお歸りなされた、常に予の心の君と崇めて、忘れることのない甥の殿　旅のお疲勞の故でか、どうやら鬱いでおいでなさるやうだね。

太子　いゝえ、さうではありません、けれども、途中の行違のために、ぐづ〳〵してゐたので、不快を感じました。……他の叔父さんたちにも迎ひに來て貰ひたいと思つてゐましたのに。

グロー　太子、貴下はまだ幼少で、御自分の心が清潔なため、僞りの多い世の中といふものがお解りになつてゐない。人の心と其外面とは、神さまは御存じだが、一致してゐることは極めて稀である、決して無いくらゐ、それほど表裏のあるものだといふことが、あんたには合點がいつてゐない。あんたが逢ひたいとおつしやる其叔父さんたちは、いづれも油斷のならん人達です。只其口先が蜜のやうに甘いからして、其心の底に毒のあるのをあん

たは今までは知らないでゐたのです、……あゝ神よ、願はくは、あゝいふ不實な、人を陷れる親友をば、太子の身邊からは遠ざけたまへ！

と祈る。

太子　神よ、願はくは不實の友を遠ざけたまへ！……けれどもあの人達がそんな者である筈はない。

グロー　（此途端に向うを見て）太子、ロンドン市長が御挨拶に來ました。

市長從者を伴れて出る。

市長　（從者と共に跪いて）神よ、願はくは、殿下のますゝお健勝に、御好運にわたせられますやう！

太子　市長どの、ありがたう。……（と一同に挨拶しながら、本意なさゝうに）わたしは、もッとずッと前に、お母さまや弟のヨオクに逢ふだらうと思つてゐたのに。あのヘスチングスは、ま、何といふ緩間だらう！

何をしてゐるんだらう？　一同が、迎ひに來るんだか、來ないんだか、知らせにも來ない。（と不平さうにつぶやく）。

ヘスチングス出る。

バッキ　あ、ちようど今あそこへ、汗を拭き〳〵、ヘスチングスがやつて參りました。

太子　（跪くヘスチングスを迎へて）おゝようこそ。母上は直いらつしやる？　え？

ヘスチ　どういふ仔細でございますやら、手前には解りませんが、お母さまのお妃さま竝びに弟君ヨオクさまは、ウェストミンスターの聖院へお入りになりました。ヨオク公には、是非殿下のお迎ひにいらつしやりたいとおつしやつたのでございますが、御母公さまが強つてお留めになりました。

バッキ　どういふわけで、そんな馬鹿々々しい、變なことをなすつたのだらう！　大僧正、あなた一つお妃にお會ひ下すつて、御幼弟ヨオク公を、すぐお迎ひの爲に、およこし遊ばすやう御勸告なすつて下さい。尙お拒みのやうな

ら、ヘスチングス卿、あなたも僧正と一しょに往つて、お妃の猜疑ぶかいお手から、無理にでも公爵を引離して、お伴れ申して下さい。

僧正　バッキンガム卿、手前の拙い辯舌で御母公をお説落し申すことが叶ひますれば、すぐにも公爵をお伴れ申しますが、どうしてもお聽入れがない場合に、あの神聖な御廟所の特權を、假にも腕力を以て、蹂躙に及ぶやうなお振舞は以ての外の儀と存じます！　此國の全土に易へても、手前はさやうな罪科を犯すことは承はりかねます。

バッキ　僧正、それア形式習慣に拘泥した頑冥な御見解といふものです。現代はどんな道德の時代だか、それを考へて御覽なさい。公爵を引張り出したからッて、聖院の掟を破ることにアなりませんよ。本來聖院の特權は、惡事を働いて、あそこへ逃込めア大丈夫と考へて、哀みを乞ふ爲にする者にこそ與へられるものなのです。ところが、王子は惡い事をなさりもしなけりや、哀みをお乞ひなさる筈もないのだから、わたしは、王子には何等の特權もお有んなさらないと思ひます。ねなさるべきでない處から、强ひてお伴れ申して來たからとて、それは掟をも特權をも犯したことにはならない。聖院へ大人が隱れるといふ例はありますが、子供が隱れるといふ例は聞いたことがありません。

僧正　閣下、ともかくも、一應仰せに從ひまして。ヘスチングス卿、さア、御一しよに參りませうか？

ヘスチ　參りませう。

太子　どうぞ大急ぎで往つて來て下さい。

大僧正とヘスチングスと入る。

ねえ、グロースターの叔父さん、弟が來ると、卽位式までは、わたしたちは、どこに住むのです？

グロー　あんたのお爲に最も好い處に、と思つてゐます。何なら、わたしの考へでは、二三日の間は、あのロンドン城に休息なすつた方が、健康の爲にも、慰みの爲にも、萬事好都合であらうと思ひます。

太子　わたしは、何處よりも、あのロンドン城が一等嫌ひです。……（バッキンガムに）あの城は、ジュリヤス・シーザーが築いたのかい？

バッキ　はい、築きはじめましたのはシーザーでございますが、次々の時代に於て、追々建直して、今日に至つたのでございます。

太子　シーザーが築いたといふことは記錄に在るのかい？　或は、只代々言ひ傳へて來たのかい？

バッキ　記錄にございます。

太子　だがねえ、たとひ記錄には載つてゐなくつても、事實でさへあれば、自然にそれが、親から子へ、子から孫へと、言ひ傳へ〳〵して、きッと後世までも

傳はるだらうと思ふねえ、世界の滅びッちまふまでも。

グロー　（傍白）齡よりもませて怜悧なのは、長生はしないといふ。

太子　（聞咎めて）え、何ですッて？

グロー　なに、あの、虛は長生はしないが、事實はいつまでも生きてると言つたのです。……（傍白）と斯う口先で瞞着しておくんだ、教訓劇へ出て來る例の惡黨のやうに。

太子　（バッキンガム其他に）あの名高いジュリヤス・シーザーは、智慧者であり勇者でもあつて、いろ〳〵な勳功をして、いよ〳〵偉い智慧者になつたので、そこで其の自分の勇名を後世に傳へるやうにと記錄に留めたのだらう。つまり、死の力でも、到底、英雄には勝つことが出來ないのだね。其肉體は生きてゐなくつても、彼れの名譽は、今も尙生きてるんだからねえ。……バッキンバム、あんたに話しとくことがある、……

バッキ　へ？　何でございます？

太子　若しわたしが大人になるまで生きてゐれば、きッと佛蘭西の舊領地を恢復すよ、で無けりや戰場で死ぬ積りです武人の資格で、王で生きてるよりも。

グロー　（傍白）短い夏には時候はづれの春が附物だ。

此うち幼王弟ヨオク公爵を先にヘスチングスと大僧正とが從いて出る。

バッキ　あ、ちようど、ヨオク公がお見えになりました。

太子　（喜び迎へて）おゝ、ヨオクのリチャード、どうおしだい、健康かい？

ヨオク　えゝ、大丈夫です、國王殿下。　さう呼ばなけりやならんでせう、これからは。

太子　あゝ。　さう呼んで貰はなけりやならないやうになつたのは、我身の爲にも、あんたの爲にも、不幸です。　お父さまが亡くなッちまつて見ると、王

といつたつても、何だか威嚴のないものになッちまつたわねえ。

グロー　（ヨオク公に）や、これはヨオクの公爵さん、暫く。　御機嫌よう！

ヨオク　はい、有りがたうございます。……おゝ叔父さん、あなた、いつうか、役に立たん草はずん〳〵大きくなると言ひましたらうり？　御覽なさい、ほら、今ぢや、わたしよりもお兄さまの方がずつと大きくおなりになりましたよ。

グロー　あ、成程、さうですねえ。

ヨオク　ぢや、お兄さまは役に立たずだとおつしやるんですか？

グロー　とんだことで。　決してそんなことは言ひませんよ。

ヨオク　ぢや、お兄さまは、わたしよりか、あんたに最屓目に見られてるんですね。

グロー　太子は御主君です、あんたは親戚です、お二人の爲に何でもしようといふわたしの深切には變りはないが、上下の別があるのです。

ヨオク　ぢや、叔父さん、わたしに其短劍を下さい。

グロー　此短劍をですか？　あ、あげましよ〳〵。

太子　あんた、（とヨオクに、非難の口吻で）乞食のやうに、物を貰ひたがるの？

ヨオク　叔父さんは深切ですから、喜んでくれるんですもの。　それにつまらない物なんだから、くれたつても可いです。

グロー　もつと良い物をあげてもいゝ。

ヨオク　もつと良いもの！　おゝ、其劍でせう？　これに添へて。

グロー　さア、これが輕くッて而して小さければね。

ヨオク　おゝ、ぢや、叔父さんは、輕くッて小さい物ならくれる、けれども重い大きい物はくれないのね、下さいッたつても。

グロー　なアにね、此劍ァあんたには少と重過ぎるだらうといふのですよ。

ヨオク　若しか重過ぎるならば、なアに、そんな物ァ、わたし、てんで重い物にしないや。

ヨオクは暗に兩義語を使つて叔父を翻弄しようとする。「重い物にしないや」は「重んじないといふ意味なのである。グロースターは此語を正面から解して、

グロー　ぢや、あんた欲しいのかい、此劍が？　え、小公爵さま？

「おちびさま」といはれた返報を嗤嗟に思ひ附いて、

ヨオク　あゝ、欲しいの、お禮が言つて見たいから、あんたの今いつた同じ言葉で。

グロー　え、どういふのです？

ヨオク　（切口上で）ありがたうよ、ほんの……少々。

太子　（氣の毒さうに）ヨオクは口がわるくて爲やうがないのです。　叔父さん、氣に掛けないで下さい。

ヨオク　（太子に）氣に掛けないで、脊中に掛けろといふんでせう？　叔父さん、お兄さまは、あんたをもわたしをも嘲弄になさるんですよ。　わたしは矮小で

猿のやうでせう、だから貴下の脊中へ乘ッかつたら、嘸似合ふだらうといふんですもの。

バッキ　（傍白）いや、どうも、當意卽妙！　叔父御を嘲弄しながら、それを耳立たせないやうにするために、上手に、手際に、自分の非難を言はれる。幼年で此手際は實に駭き入つたものだ！

グロー　（太子に）殿下、そろ〳〵お通りになつては如何ですな？　手前とバッキガムとは、御母公のお許へ參つて、殿下をお迎へのため、ロンドン城へお越しあるやうにお勸めしませう。

ヨオク　おや、殿下、あんた城へいらつしやるの？

太子　攝政の叔父さんが、是非さうしろといふんだから。

ヨオク　わたし、城ぢや、怖くッて眠られやしないと思ふわ。

グロー　おや、何が怖いのです？

ヨオク　だつて、クラレンス叔父さんの怨靈が出るでせう。叔父さんはあそこで殺されなすつたつて、お祖母さまが然うおつしやいましたもの。

太子　何の怖いことがあるもんかね、死んぢまつた叔父さんなんかが？

グロー　なアに、生きてる叔父さんだつて、氣にするにア及びませんよ。

（打消すやうに言ふ。）

太子　えゝ。生きてゝさへ下さりや安心だけれど。（と母方の叔父のことを思ひ出したらしかつたが、氣を替へて）さ、往きませう。……（獨語のやうに）あゝ、かうして城へ往く間も、あの叔父さんたちの事が氣にかゝつてならない。

（センネット調の喇叭。グロースターとバッキンガムとケーツビーだけを殘して皆々入る。）

バッキ　閣下、あのお喋舌のおちびさんは、きッと智慧者のお袋さんに吹込まれて來たのでせう、あんな風に貴下を侮辱するといふのは。

グロー　無論々〳〵。ありや中々すゝどい小僧だ。大膽で、機敏くて、怜悧で、生意氣で、役にも立つ。徹頭徹尾、お袋そつくりといふ奴だ。

バッキ　で、それはまアよしとして。……おい、一寸、ケーッビー。……足下は、わたしたちの內命をば決して他へ洩らさないと同時に、其實績を擧げる事にも十分骨を折ると誓約したのだが、先刻途中で談した諸點に就いては如何思ふね？　あのウィリヤム・ヘスチングスは、多分容易く我黨に同意させることが出來るだらうと思ふが、どうだらう？　こゝにお在の公爵閣下を、此國の王座にお卽かせ申すことに就いて。

ケーッ　あの方は故王との御關係上、非常に太子を愛敬してお在ですから、殿下に反いてといふことになりますと、覺束ないでございませう。

バッキ　では、スタンリーは如何だらう？　あれは？

ケーッ　あの方は、萬事ヘスチングスさまのなさる通りになさるでせう。

バッキ　（一寸考へて）それぢやアまア、斯うだ。ケーッビー、ではねえ、遠廻しにヘスチングス卿の腹を探つて見て下さい、吾々の計畫に對して、ほゞ如何な感じを有つてゐるかを。その上で、明日彼男を城へ呼出して、王位繼承に關する會議に列せしめよう。若し此方へ引寄せられさうなら、奬勵して、此方の理由一切を打明けてもよろしい。が、若し冷然頑然として心を傾けないやうなら、足下も同じやうな態度を取つて、話を中止して、すぐ其模樣をわたしたちへ知らせてくれ。明日は議論が二派に分れるだらうから、大いに足下に働いて貰はねばならんから。

グロー　ウィリヤム卿へよろしくいつてくれ。ねえ、ケーッビー、あの仁に然ういつてくれ。彼れの物騷な舊反對黨共は、明日ポンフレット城內で外科手術を施すことになつてゐると。だから其めでたい知らせのお祝ひに、ショーア夫人を、例よりも特別丁寧に、キッスなすつたらよからうッて、然う言つ

てくれ。はゝはゝはゝ！

バッキ　ケーツビー、さ、どうか、しつかり巧くやつて來てくれ。

ケーツ　承知いたしました。及びます限り盡力いたします。

グロー　眠る前に返辭が聞かれようか？

ケーツ　はい、必ずお知らせ申します。

グロー　二人ともクロスビーにゐるから、あそこへ來てくれ。

ケーツビー入る。

バッキ　ところで、ヘスチングスが、われ〳〵に同意しないと定つたら、どうしませう？

グロー　首をちよん切るさ。……どうにか結局を附けよう。それから、若し、いよいよわたしが王となつたら、足下はヒヤフォードの伯爵領を請求なさい、又兄の故王が所持してゐた動産類を請求なさるが可い。

バック　其お約束をお手づから頂戴することにいたしませう。

グロー　必ず快くお渡しする。早く夕食を濟して、計畫を多少具體的に取纒めることに着手しよう、

二人とも入る。

第二場　ヘスチングス卿の邸前

使番の者一人出る。樓上へ向つて、

使　もし、もし！　お殿さま！

ヘチス（樓上の奥にて）戸を叩くのはだれだ？

使　スタンリー卿からの使ひの者でございます？

ヘスチングス　樓上に出る。

ヘスチ　何時だい？

使　ちようど四時を打ちました。

ヘスチ　此頃は夜長だから、御主人はよく眠り得ないのかい？

使　さやうかと存ぜられます、只今申し上げる趣旨によりますと。　先づ、閣下へよろしくと申されます。

ヘスチ　それから？

使　それから申されますには、昨夜猪が自分の兜に咬み附いたといふ夢を見たといふことを申せ。　且つ又、二ヶ所で會議が開かれまするところ、其議決が一方で定ります場合には、閣下と手前主人とが他方に於て痛歎に及ぶこと〻相成ります。　それゆゑ、わざ〳〵使ひを以て閣下の御意の程を伺ひ、若し御同意でありますれば、すぐさまお馬にめしまして、至急手前主人と共に、北方へお落去遊ばしますやうにと申せ、靈魂の直覺によつて、危險の相迫つてゐることは確實であるから、と申されましてございます。

ヘスチ　（輕く聞流して）さ、さ、歸つて御主人に言ひなさい。　二ヶ所の會議の事は御心配には及びません。　御主人とわたしとは其一方に出席してゐるし、他方にはわたしの家來のケーッビーが陪席してゐるのだから、此方が知らんうちに、何一つ議決になるやうなことはあるまじき筈だ。　御心配の事は全

く底も理由もないことです、と言つたと傳へて下さい。それから、お夢に至つては、それは不安な睡眠のさせる惡戯たるに過ぎない、然るに、御信用は阿呆らしうござる、と申したといつて下さい。追掛けもしないのに、猪を怖れて逃げれば、却つて奴をして追掛けようといふ心を起させるやうなものです、と。さ、御主人に、すぐ起きて此方へお越しなさい、御一しよにお城へ參上しよう、すれば彼處で、猪が存外やさしく吾々を待遇するのを御覽になるだらうと傳へて下さい。

使　へい〳〵、其通り申し傳へませう。

使番の者入る。ヘスチングス樓を下りて下へ出る。とケーツピー出る。

ケーツ　お殿さま、ます〳〵御機嫌ようらせられますやうに！

ヘスチ　や、機嫌よう。大さう早いねえ。え、どんな模樣？　どんな樣子だ？　相變らず不安の狀態かねー？

ケーツ　全くぐらついてゐて落付がございません。今にも顚覆りさうです。これを安定させるには、リチャードさまのお頭に冠りをのッけるより外に爲樣はありません。

ヘスチ　え、何をー？　お頭！　冠りとは王冠のことをいふのか？

ケーツ　へい、さやうです。

ヘスチ　あんな頭に王冠の載ッかるのを見るくらゐなら、おれは此おれの頭を此肩から切離されッちまつたはうが可い。だが、あの仁が、果してさういふ欲望を抱いてゐるのか？　汝は然う思ふかー？

ケーツ　へい、大丈夫です。で、それは閣下のお爲にもなりますこッてすから、おそらく、熱心に御加擔なさいますだらう、と申すんで、そこで特にお知らせになりますんで、……と申すのは、本日、その、閣下のお仇敵であつた妃の御親

戚一同がポンフレットで死刑に相成りますといふお目出たいお左右です。

ヘスチ　成程、おれは其知らせを聞いて哀悼はしない、あいつらは始終おれに仇をした奴等だから。けれどもリチャードどのに左袒して、主君の嫡々を其正統の王座から排ける爲に口を開くなんてことは、おれは死すともしない、それは神が御存じのことだ。

ケーツ　神よ、願はくは殿の其御忠烈なお心を變へさせられませんやうに！

ヘスチ　併し、幸ひに命あつて、おれを讒言したあいつらの此あさましい末路を見ることが出來たのは愉快だ、以後一年ぐらゐは笑ひつゞけられるわい。……實はなう、ケーツビー……

ケーツ　へい？　何でございます？

ヘスチ　二週間と經たん間に、二三人の者を急に遠い處へ立たせる積りだ、さういふ目に逢はうとは思つてゐない奴等を。

ケーツ　閣下、覺悟もしてをらず、豫想もしてをらんで死にますのは、いやなこッてございますねえ。

ヘスチ　けしからんこッた、けしからんこッた！　ところが、リヴースやヴーガンやグレーやの運命は正にそれだ。まだ其他にも二三人ある。そいつらは、リチャードどのやバッキンガムどのに特に懇意にされてゐる予や汝同やうに、飽迄も安全だとばかり思ひ込んでゐる。

ケーツ　あのお二方は閣下を非常に重んじてをられます。……（傍白）ロンドン橋へ晒し首にする主な首だといふので。

ヘスチ　そりやおれも知つてゐる。が、然うしてくれて當然なのだ。

スタンリー出る。

（目早く見て）さ、こちらへ〳〵。猪を突く槍は、どこへ忘れて來たのです？猪を怖がつてゐながら、武器なしの手ぶらですか？

スタン　お早うござる。……ケーッビー、お早う。（ヘスチングスに）貴下は戯談をおつしやつてるけれど、實際わたしは二ヶ所の會議といふことが氣になつてならん。

ヘスチ　ねえ、……わたしだつて、あなた同樣に、命は大切だ。　さうして實際、現在ほど命を大切視してゐた時はなかつたといつてよろしい。　ねえ、身を安全だと信じない以上、假にも如是な風に浮かれてゐることが出來るとお思ひですか？

スタン　只今ポンフレットにゐるあの連中とても、ロンドンから馬を乘出した當座には、頻りに浮かれて、其身の安全を信じてゐたのです、さうして實際、何等危惧すべき理由もなかつたのです。　けれども、どうです、空模樣が俄に變つた。　あゝいふ惡意の暗擊がないともいへない。　どうかこれが、わたしの無要な臆病根性であるやうにしたいもんだ！……え、お城へ往きませうか？　大ぶ時刻が進みました。

ヘスチ　さ、さ、御一しよに。……え、御存じですか？　今お話の連中は今日首を切られるんですぜ。

スタン　あの手合は正直者なんだから、首を載ッけておいたつてもよさゝうなものだに、彼等を彈劾した手合の中には、帽子を載ッけてゐるさへ不當だと思ふやうな奴等がゐる。……さ、往きませう。

（使者役の者（名はヘスチングス）出る。）

ヘスチ　先へおいでなさい。　わたしはあの男（と使者へ科）と話すことがありますから。

（スタンリーとケーッビーと入る。）

使　（使者のヘスチングスに）おゝ、ヘスチングス、どうだね！　お前の景氣は？　お名前にあやかりまして、大ぶ景氣よく暮してをります。

ヘスチ　いや、實際おれもなう、お前に先日こゝで逢つた時よりは、景氣がよくなつてゐるよ。あの時には、お城へ罪人の資格で送られるとこだつた、お妃の一味の者の讒言で。が、今は……こりやお前だけに内々で話すのだが：：けふは其仇敵共が死刑に處せられる、で、おれは以前よりは、ずッと景氣のいゝ身分になつた譯だ。

使　どうか其御好運を永遠に御享樂遊ばしますやう？

ヘスチ　ありがたう〳〵。さ、こりや祝ひのしるしだ。

財布を投げてやる。

使　神明、閣下を護らせられますやう！

使者入る。

一僧官出る。

僧官　よい處でお逢ひ申しました。尊顔を拜し、恐悦に存じます。

ヘスチ　ありがたう、サー・ジョン。過日は御苦勞でした、まだあの勤の報酬もせなんだ。次の安息日に來て下さい、禮をするから。

僧　はい、參上いたします。（と更に何か小聲で話してゐる。）

バッキンガム出る。

バッキ　おや、侍從長、僧官とお話中ですか？　ポンフレットにゐる御親友たちこそ僧官の必要を感じてゐませうが、閣下は、さしあたり、司悔僧の必要なんかお有りでは無い筈です。

ヘスチ　いや、全くのところ、只今此坊さんに逢ふと同時に、其お話の連中のことをふと思ひ出してゐたところです。：：城へおいでゝすかい？

バッキ　は、さやうです。が、長くはゐますまい。閣下よりは先へ歸るでせう。

ヘスチ　きつと然うなりませう、手前はあそこで晝食をしますから。

バッキ　（傍）夕食もせずばなるまい、お前はそれをまだ知らないでゐるが。：：さ、

往きませう。

ヘスチ　お伴しませう。

入る。

第三場　ポンフレット城

當城の預り役サー・リチャード・ラトクリッフ、斧槍を携へたる警護卒を從へて、リヴース、グレー、ヴーガンの三人を死刑場へと引立てつゝ出る。

ラトク　（警護卒に）さア、囚人を引出せ。

リヴー　サー・リチャード・ラトクリッフ、お前に言つておくことがある、けふは臣たる者が、誠實に道を守つて、君の爲に忠義を盡したので、却つて死刑に處せられるといふ日だ。

グレー　神よ、願はくは、我太子をば彼等野獸の群に對して、何卒守らせられますやう！（ラトクリッフらに）汝たちは怖ろしい吸血鬼同然の奴等だ！

ヴーガ　今に見をれ、あんなことをしなければよかつた、と後悔する時が來るから。

ラトク　（三人に）さ、早く。　お前さんたちの壽命は既う切れてゐる。

リヴー　（城を見上げて）おゝ、ポンフレット、ポンフレット！　おゝ、汝、王侯や貴族に取つては、惡緣の深い、不吉な、忌々しい、血まみれの牢獄よ！　汝の罪深い此城壁の中で、リチャード二世王が無慚の弄り殺しにお逢ひなされた。さらぬだに物凄い此居處に、今日又新たな醜名を加へるため、何の罪もない我々が血を流すのぢや、汝に飲ますために。

グレー　あのマーガレットの咒ひが我々の頭上に下つたのです、リチャードがあの妃の愛兒を刺殺した時に、我々が手を束ねて見てゐたといふので怨んでゐたが。

リヴー　あの婦人は、あの時、ヘスチングスをも咒つたし、又バッキンガムをも咒つたし、それから又リチャードをも咒つてゐたつけ。　おゝ、神よ、我々に對する彼女の咒ひをお取上になつた以上、あの惡者共に對するあの女の祈りをも、何卒お忘れなくお取上下され！　さうして何卒、罪なうして流します る此我々の血を以て、姉エリザベスや其子たる王子たちの血の代償とお見做し下されますやう！

ラトク　（三人に）早くなさい。　死刑の刻限が既う過ぎてゐます。

リヴー　さ、グレーどの！　さ、ヂーガンどの！　みんながお互ひに抱き合ひませう。　さうして別を告げませう、天で再び廻り逢ふまで。

告々く入る。

第四場　ロンドン城内

バシキンガム、スタンリー、ヘスチングス、イリーの監督、ラトクリッフ、ロヴェル、

其他出て、おの〳〵大テーブル脇の席に着く。

ヘスチ　諸卿、では、すぐさま。今日會合いたしたのは、御戴冠式の日取を決定せんが爲です。神の御名に於て、御發言なさい。何時を御卽位の當日としませう。

バッキ　御卽位の準備は總て整つてゐますか？

スタン　整つてをります。お日取だけが未定なのです。

イリー　では、手前は、明日こそ吉日だと存じます。

バッキ　攝政どの〻此點に關する御意見は何人か御存じでせうか？　グロースター公と最もお親しい方はどなたです？

イリー　其儀は閣下こそ最も速かに御存じあるべきことかと存じます。

バッキ　だれが？　え、手前が？　われ〳〵はお互ひに顏は知り合つても、心中は解りませんよ。彼の君はわたしの心を知らず、又わたしは彼の君の心中

を知りません。……恰も貴下がわたしの心を御存じないと同樣に。……ヘスチングス卿、あなたは公爵と最も御別懇でせう。

ヘスチ　さア、公爵の御好意は、平生深く感謝してゐる所です。が、御卽位に關する同公爵の御意向は曾て伺つて見たこともなければ、其儀をいかやうにもお洩らしあつたことはありません。併しながら、諸君、先づ一應ともかくも、各自の御意見をお述べになつてはいかゞです？　手前は公爵に代つて贊否を申しませう、多分公爵は、手前の考へに對して、御異議をおつしやるまいと存じます。

グロースター出る。

イリー　あ、ちようどよい處へ公爵がお見えになりました。

グロー　諸公卿、貴族がた、どなたもお早う！　大ぶ寢そびれまして、遲刻しました。が、多分大切な御相談は、手前の不在に係はらず、御進捗に及んだでありま

せうな。

バッキ　閣下、あなたが恰どよい機會の處へ御入來でありませんでしたら、ヘスチングス卿があなたのお持役の白を、いや、閣下に代つて、御卽位式に關する御賛否を申し述べられる筈でございました。

グロー　それを遠慮なくしてくれられる御仁はヘスチングス卿の外にはありません。卿はよく手前の心を御承知です、且つ深く手前を愛してをられます。

ヘスチ　お言葉ありがたうございます。

グロー　（卒然監督に向つて）イリーの御領主！

イリー　は、閣下？

グロー　わたしが先頃ホルボオンへ參つた時、あんたの處の御園内に、好い草苺が澤山あるのを見ましたつけ。どうか、あれを少々取り寄せていたゞきたいものですねえ。

イリー　お易い御用です。早速取りに遣しませう。

と直に席を立つて入る。

グロー　バッキンガムさん、ちよいと。

と一隅へ退いて小聲で、

ケーツビーが、一件に關して、ヘスチングスの肚を探つて見たところ、あの剛情先生、ひどく熱くなつて、主君の子に英吉利の王位を失はせるやうな計議に賛成するくらゐなら、……主君の子といふ言葉に怖ろしく敬意を含めて……むしろ首を失したはうが可いと言つたといふことです。

バッキ　ぢや、閣下、すぐ御退出なさいまし、わたくしもお後から參りますから。

グロースター入る。　バッキンガムつゞく。

スタン　時に、御卽位のお日取の件をまだ取定めませんでしたが、手前は、明日ではあまり急だらうと存じます。手前なぞは、もう少々延びればですが、でな

いと、殆ど準備をする暇がありません。

イリーの監督又出る。

イリー　攝政どのは何處へいらせられましたなり。　草苺を取寄せましたが。

ヘスチ　（スタンリーらに）グロースター公は、けふは大そう御機嫌がよい。　何か大きにお氣に入つたことがあるらしい、あんなにお元氣に朝の御挨拶をなさるといふのは。　基督教國廣しと雖も、公爵のやうに愛憎好惡を隱し得ないで、有りのまゝに見せる方はありませんよ。　お顔を見りや、すぐにお心持が解るんですから。

スタン　で、今日の公のお顔色に、あなたはどんなお心持をお認めになつたのですゝ？

ヘスチ　だれに對しても御不快なんかは無いらしいといふことを。　若し有れば、お顔色に現れる筈ですから。

スタン　（不安げに）どうか然うであつてほしいのですが。

グロースターとバッキンガムと又出る。

グロー　（前とは打つて變つた憤激の體で）諸君御一同に承はりたい、最も憎むべき、極惡無慚の魔法を以てして、手前の一命を縮めようと計つた者共があります、さうして、その怖ろしい咒詛は、既に、自分の此肉體に其效驗を及ぼしたのです。　其者共をば如何處分したら當然であるかといふことに就いて、御意見を承はりたい。

と居丈高になつていふ。　皆々驚く。

ヘスチ　平生特に閣下を愛敬してをりまする手前は、僭越ながら、先づ最も熱心に其犯人を、それが何者であらうとも、嚴重に御處分あらんことを希望します。

グロー　其者共は死罪が相當だと存じます。　では、其犯罪の證據をお見せ申さう。　魔法でどんなにやられたかを御覽

なさい。（といひつゝ袖を捲りて、二の腕を現はして）こら、此通り、わたしの腕は、まるで若木の枝が枯れでもしたやうに、萎びッちまつた。こりやあの兄エドワードの未亡人がしたことです。あの奇怪至極の魔女が、あの賣女の淫亂女のショーアめと協同して、魔法で以て呪つて、わたしを不具物にしようと企てたのです。

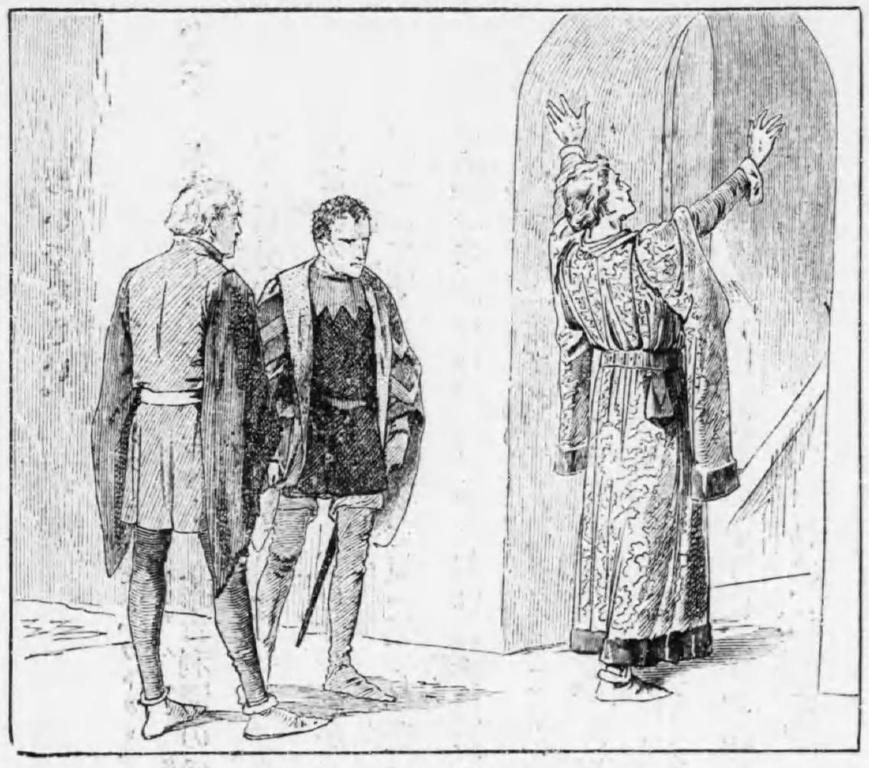
ヘスチ　（信じかねて）萬一にもあの人々が然ういふことをいたしたやうなら……

グロー　萬一！　（ヘスチングスをきッと睨んで）汝は、あの憎むべき淫婦の保護者を以て任じてゐる男だ。汝は敢て萬一を口にしようとするのか？　此謀叛人めが！　（ラトクリッフらの方を見返つて）あいつの首を斬ッちまへ！　セント・ポール！　おれは彼奴の首を見るまでは食事をしないぞ。ロヱル！　やい、ラトクリッフ！　きッと其通り實行しろ。……（驚き呆れてゐる貴族らを見返つて）自分を愛してくれられる他の人々は、席をお起ちなすつて、わたしに從いて

おいでなさい。

（ヘスチングスとロヱル、ラトクリッフの他は皆入る。）

ヘスチ　（長大息をして）おゝ、おゝ！　英吉利國の爲に、あゝ、歎かはしい！　歎かはしい！　自分のことは些もかまはんが。豫め防ぐことの出來たものを、こんな目に逢ふのは、つまり、自分が愚かで、自ら招いたのだ。スタンリーが、猪に兜を咬まれる夢を見たから、逃げろと言つたのを、おれが馬鹿にして聽かなかつた。けふもおれの乘馬が三度まで物に驚いて躍いた。彼馬め城を見上げて、妙に門内へ入ることを厭つた、主人の殺される場處だと思つたからだらう。おゝ、先刻途中で逢つたあの僧官が入用な身となつたわい！　今となつて、あの使ひ番の者に、あんなことを言つたのを後悔する。敵に勝つたかのやうに、浮かれて、ポンフレットにゐる手合は酷く屠り殺されるのだが、おれは、特寵を得てゐるから、大丈夫だなんぞといつ



たのを。……おゝ、マーガレット、マーガレット！　お前さんの凄い呪ひが、とう〳〵此慘なヘスチングスの身の上に落ち下ることゝなつた！

ラトク　さ、早くなさい。公爵は只今お食事中でせうから、手取早く〳〵お懺悔をお濟しなさい。

ヘスチ　あゝ、あゝ、愚かな我々共は、人間の只一時の恩

寵を、神のそれよりも有難がつて求める！　權門豪族の、空氣も同然の、あの空な機嫌顏を唯一の賴みにして暮してゐる者は、帆柱の上で居眠りをする泥醉の水夫のやうなものだ、こく〳〵やるたびに、何時怖ろしい大海の深底へ落込むやら知れたものでない。

ロヱル　さ、さ、お早く。泣きわめいたつて無效です。

ヘスチ　（天を仰いで）あゝ、殘忍なリチャードどの！　あさましい英吉利國！　どんな澆季の時代にだつて、曾て例のなかつたやうな、怖ろしい時節が來るに相違ない。……（ロヱルらに）さ、首斬臺へ案内してくれ。おれの首をあの仁の許へ持つて行け。今笑つてゐる奴等とても、程なく命を失ふだらう。

ヘスチングスを引立てゝ皆々入る。

第五場　ロンドン城の城壁

グロースターとバッキンガムとが、非常に醜い、錆びた鎧を被て急いで出る。

グロー　おい、足下、足下は身體をぶる〳〵慄はせて、顏の色を變へて、半分物を言ひかけて息を殺し、言ひかけるかと思ふと又止める、といふ藝當が出來るかい、如何にも怖れ駭いて、氣狂ひになりかけてゐるかのやうに？

バッキ　ヘッ！　悲劇役者の眞似ぐらゐは立派にしてのけますよ。言ひかけて後ろを見て、それから、あッちこッちうそ〳〵と詠め廻して、藁しべ一つ動いても悸とする、身を慄はせる、如何にも危惧の念を抱いてゐるらしく。恐怖の顏色なんかは、故とらしい拵へ笑ひと共に、わたしのお手の物です。此二つは、いつでもござれです、いつでも卽座に役に立ちます。……時にあのケーッビーは出掛けて行きましたか？

グロー　うん。……あ、もう市長を伴れて來た。

市長とケーッビーと出る。

バッキ　市長どの、……

グロー　（いかにも昂奮した體で）そこの釣橋に注意しろ！

此時やゝ遠くで軍鼓の音がする。

バッキ　（わざと驚いた口吻で）や！　太鼓ですぞ。

グロー　（けたゝましく）ケーッビー！　城壁へ登つて見ろ！

バッキ　市長どの、お呼び迎へ申したのは……

グロー　（やはりけたゝましく）あ、あつちを御覽！……それ、防禦々々〳〵！　敵が來た。